

Title	浜野文庫善本略解題(二)
Sub Title	
Author	大沼, 晴暉(Onuma, Haruki)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1989
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.24 (1989.) ,p.367- 419
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000024-0367

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

浜野文庫善本略解題 (二)

大 沼 晴 暉

例 言

一、本稿は浜野文庫善本のうち、一bの函架番号が附される五十一点を取上げ、略解を加えたものである。尚第二四は虫損崩落甚だしく、解題は補修後に附すこととし本稿には割愛したので、実数は五十点となっている。

一、一bに分類排列される書入本は、その書入の自写か移写か

判然とし難いものがまま存する。臨写した移写本は底本と相似てくるからである。本稿では成可くは自筆と判明せる書と比べ、自他の別を識別せんと心掛けた。その書入を含む翻印の存するものは注記したが、単なる当該書の翻印は省略に従った。尚書入のないものでも、当該版本等の影印がある場合は参考に掲出した。

一、解題は、表紙・見返・扉・前附・本文巻頭・版式或いは書写の体式・尾題・後附・刊記又は奥書・表紙扉裏表紙等を除

いた墨附丁数・修補・旧蔵印等の諸事項を、ほぼ此順で略述した。しかし説明の便宜上、必ずしも序次にはこだわらない。また修補の単なる虫損直しの場合、同じく修補時に挿入した新補遊紙の類は一々明記しなかった。

一、本稿は形態学的な事項を主とし、内容には立入らない。また著者や書入のなされた当該書については、人名辞書や索引・伝記・解題書・研究書類の備わるものが多く、略記するに止めた。本稿は各専門家の精査を俟つたためのもので、その呼水となれば幸である。

一、使用字体は通行体を原則とし、一部旧体・別体字を残した。また引用文は、原文の句読は残したが、訓点・送仮名の類は印刷の都合上、殆ど省略に従った。

一、標目に又とあるのは前項と同版であることを示す。尚同版本に於ては著者事項以下同一の場合は記載を省略した。

一、本略解題は折を見て、随時継続発表の予定である。お気づきの点を何なりとお知らせ頂ければ幸甚である。

附記 本稿と原本との照合校正等について、私の斯道文庫講座に参加せる学生諸氏の協力を得た。記して感謝の意を表する。

一 b 書入本

うつほ物語(題簽)二〇卷 延宝五年一月刊 文化三年三月修(大坂 奈良屋長兵衛) 大三〇冊 絵入 書入本

紺色表紙(二五・八×一八・二糎) 貼題簽に「うつほ物語小題(幾)」と刻し、題下に「今板本幾の卷(ノ幾)」/古本幾の卷

と二行に刷印さる。蓋し良質の古写本なく、誤脱・錯簡・重複の多い、また巻名と本文の諸本で必ずしも一致しない此本邦初の長編物語享受の苦心が、題簽の刷印からも自ずと窺われる。

尚其上本書には題簽上部右に藍筆で、又下部に朱筆で夫々序次を記し、朱筆の序次に従って各冊の排列を改めている。今聊か煩瑣に亘るが、藍筆書入部分・小題・今板本・古本の巻次を誌した題簽を、本帙の編次に従って以下に掲げておく。第一冊

「二」俊蔭一/今板本十六の卷ノ一/古本一の卷「四一丁、第二冊「二俊蔭二止/今板本十六の卷ノ二/古本一の卷」一から通八〇丁、第三冊「三忠こそ/今板本九の卷/古本三の卷」三四丁、第四冊「四藤原の君/今板本七の卷/古本二の卷」五四

丁、第五冊「廿四嵯峨の院一」／正本国譲下卷／今板本十三の卷ノ一／古本五の卷「三五丁、第六冊「廿五嵯峨の院二」／正本国譲下卷／今板本十三の卷ノ二／古本五の卷」通六八丁、第七冊「廿六嵯峨の院三止」／正本国譲下卷／今板本十三の卷ノ三／古本五の卷」通一〇五丁、第八冊「五梅の花笠（上と朱書）」／一名春日詣／今板本十四の卷／古本四の卷「二八丁、第九冊「七吹上下（上と朱筆にて訂す）」／正本上卷／今板本十一の卷／古本七の卷」四七丁、第一〇冊「八吹上上（下と朱訂）」／正本下卷／今板本十の卷／古本六の卷」二四丁、第一一冊「十一祭の使（上と朱書）」／今板本十二の卷／古本八の卷」四八丁、第一二冊「九菊の宴一」／今板本六の卷ノ一／古本九の卷」二八丁、第二三冊「十菊の宴一止」／今板本六の卷ノ二／古本九の卷」通六五丁、第一四冊「十二あて宮」／今板本十七の卷／古本十の卷」二八丁、第一五冊「十三初秋一」／一名とはかりの名月／又すまひの節会／又内侍の督／今板本十五の卷ノ一／古本十一の卷」五三丁、第一六冊「十四初秋二止」／今板本十五の卷ノ二／古本十一の卷」通九五丁、第一七冊「十五田鶴の村鳥」／一名おきつしらなみ／今板本八の卷／古本十二の卷」三一丁、第一八冊「十六蔵ひらき上の一（一と朱書）」／今板本一の卷ノ一／古本十三の卷」四三丁、第一九冊「十七蔵ひらき上の二止（二と朱書）」／今板本一の卷ノ二／古本十三の卷」通八八丁、第二〇冊「十八蔵ひらき中（三と朱書）」／今板本一の卷／古本十四の卷」五二丁、第二一冊「六蔵ひらき下」／正本嵯峨院／今板本三の卷／古本十五の卷」五六丁、第二二冊「廿二国譲上の一（三と朱書）」／正本中卷／今板本十八の卷ノ一／古本十九の卷」四〇丁、第二三冊「廿三国譲上の二止（四と朱書）」／正本中卷／今板本十八の卷ノ二／古本十九の卷」通八〇丁、第二四冊「二十国譲中の一（一と朱書）」／正本上卷（上と朱書）」／今板本十九の卷ノ一／古本十八の卷」四五丁、第二五冊「廿一国譲中の二止（二と朱書）」／正本上卷／今板本十九の卷ノ二／古本十八の卷」通八三丁、第二六冊「十九国譲下（四と朱書し、小題の頭に朱鉤点を引く）」／正本蔵開下卷／今板本二十の卷／古本二十の卷」五八丁、第二七冊「廿九楼の上上の上（三と朱書）」／今板本四の卷ノ一／古本十六の卷」四九丁、第二八冊「三」十楼の上上の二止（四と朱書）」／今板本四の卷ノ二／古本十六の卷」通八三丁、第二九冊「廿七楼の上下の一（一と朱書）」／今板本五の卷ノ一／古本十七の卷」三一丁、第三〇冊「廿八楼の上下の二止（二と朱書）」／今板本五の卷ノ二／古本十七の卷」通七

二丁。

すなわち本帙の排列は流布本系の巻序を古典大系解説に云う第四系統（九大細井貞雄校本）の巻序に改編したものである。

しかし今板本と正本とで巻名と本文とが混乱しており、藍筆と朱筆で両様に細井本との整序を行ったことが分る。但し藍筆は「正本嵯峨院」と「梅の花笠」の序次を誤っている。本文の上では、藍筆で記された巻序を迎れば、本版を底本とし細井貞雄校本で大幅に改編を加えた古典大系本とほぼ並行することになる。

本版は内題なく、単辺（一九・七×一五・六糎）無界十二行、句点を附す。版心白口、「俊十六」の如く小題を略記し、今板本の巻数を記して下部に丁附を刻す。第一三冊「菊の宴」の末に「今案菊宴為第十六卷歟／あてみやの事詳也」と刻さる。第二六冊「国譲」の末に「延宝五丁年／初春吉辰開板」の原刊記の前に「補刻 文化三年丙寅春三月吉旦／書林大坂本町四丁目 葛城宣英堂 良屋長兵衛板」と入木せる刊記が刻されている。此は第五冊「嵯峨の院」の第二三・一四丁の間にも誤綴されている。各冊二一六図程の半丁の挿絵入り。第一五冊「初秋」の二二丁裏には大きな墨格がある。第二六冊「国譲」の第五〇丁落丁か。

「うつほ物語」には本版以前に、古活字版二種や万治三年八月京林和泉掾刊行の絵入整板本があるが、何れも「俊蔭」のみで、本版によって始めて流布した。しかし前述した如く本文が乱れて読みにくく、国学者たちの様々な解説整序の試みが為され、それらが多くの書入本となって伝存している。本文庫にも別に佃島住吉神社の平岡好道氏より寄贈された、細井貞雄・田中道麻呂・横山由清等の順次の校合書入を移写する大坂秋田屋茂兵衛等の後印本大三〇冊を存する（B一―ヒ一―三〇）。平岡文庫本では刊記の書林の下の住所と書肆名とが削去され、三都発行書林一〇肆を並べた単辺奥附が裏表紙見返に貼附されている。（追記一）

書入は奥書の類を全く欠き、今何人のものか不明であるが、朱墨藍緑の四様で振漢字を施し、朱にて誤刻や仮名遣を正し濁点句読をうち、緑藍にて注解や錯簡・重複・落句等を指摘し、緑筆にて官名や人物の注記・主格の補入等、読解のための便を講じている。今例えば第二一冊「正本嵯峨院」の「菊の宴」との重複箇所（第一八丁裏・一九丁表）を見れば

□是より以下菊の宴一ノ巻と大に乱れましれり九月廿日詩
つくりしたまひとありて後大将に春宮のゝたまふ小詞に神

無月の衣かへにも云々とのたまへり依而こゝは霜月朔日こゝる残れる菊のゑんきこしめしけるにとあるを突とすしかれとも菊の宴の巻この言葉によりて名のいつれは猶菊の宴の文章ならん歟

と藍筆にて誌されている。押紙や不審紙が所々に貼附されている。ハ〇九―一b―一―三〇

逸号年表 藤原貞幹撰 伴信友補 近写 大一冊

焦茶色表紙(二六・七×一九・一糎)単辺刷梓題簽に「逸号年表伴信友翁」と書す。「引用書目」の第一丁裏第四行より「追

加引用書目」と朱書(実は代赭、以下同じ)して全三丁。「逸

号年表/左京 藤原貞幹 纂」の題署次行に「若狭人伴 信友

補」と朱書す。単辺(二〇・八×一五・四五糎)内を七段に

分割し、第一段(高約〇・九糎)に帝名を記し、以下高約二・

二―三・四糎の六段内に、上段に正史による年表、以下各文献

より輯集せる大宝元年に至る逸年号を記載する。尾題「逸号年

表尾」。本文全二二丁。第二三丁裏に「此老冊借栗田寛藏書謄写

之畢/五百樹」の奥書あり。入紙が施され、巻頭に「中尾/藏

書」の朱印が鈐せらる。

本書は寛政一〇年一月京鶴鷓惣四郎等三肆の刊本に、信友が

増補を加えたものの写しである。但し栗山の叙は写されていない。此板元の二肆を削去した北村庄助印本に、信友が自筆で書入たという書(川瀬一馬氏藏)の写真二葉が伴信友全集別巻に掲載されているが、本書はそれと比するに増補書入部分は少い。

尚寛政一〇年刊本には、同年紀を持つ鶴鷓惣四郎の単独覆刻版があり、本文と引用書目に小異がある。次掲の中山信名本は此覆刻本の写しで、引用書目に「大織冠公伝」「峯相記」の二書が増え、二六点二七種となっている。所載の序次にも少しく相違がある。

本書は静嘉堂文庫に貞幹の自筆稿本が存し、始めは「異号年表」と題されていたことが分る。

信友の増補は眉上・空欄・第一二丁裏・第一三丁表に朱筆で多々書記されている。

伴信友、弘化三年没、享年七十四。その老大な自筆稿本や書入本は、京都大学附属図書館・天理図書館・大東急記念文庫また生地の小浜市立図書館等に分蔵されている。信友は本書の他に「史籍年表」の編修を行っている。又川瀬氏藏の「逸号年表」自筆書入本には、「中古譌年号考」と題する草稿一葉が添えられていると云う。

藤原貞幹、無仏齋と号す。国学者、考古の学を好む。寛政九年没、享年六十六。ハ〇九一―b―二―一

増補逸号年表 藤〔原〕貞幹撰 中山信名補 中山信名

写 半一冊

砥粉色布目表紙(二四・二五×一六・二糎) 双边刷粹題簽に

「増補逸号年表 藤貞幹纂」と書す。表紙右に年月日等を記し

消去す。僅に「三月」と見ゆ。見返に本文用紙と等しい单边有

界八行罫紙貼附。「増補逸号年表／左京 藤 貞幹 纂／隅東

中山信名 補」と題署す。单边(二九・七×一四・九糎) 八行

罫紙を十段に分割し、上から朱・藍・茶・黄・墨の順に夫々横

線が引かる。尾題「増補逸号年表尾」。本文一四丁。次に「貞

幹曰」として板本題署に続く前書と、「柴邦彦曰」として栗山

叙の前半部分を記し、以下は「云々」として省略。一丁。「引

用書目」「補」合二丁。「凡例」一丁。凡例の末に「中山信名平

四 識」と書す。「保命／館記」「大原／堂印」(象型)「信中墟

里／天籟書閣／原氏書画／金石之記」「信中潮尾／原氏図書」

(象型) 各朱印を鈐す。原昌言旧蔵。

鶴鶴摺四郎の覆刻板本を写し、中山信名が増補したもので、

帝名は匡郭上層に記され、第一一丁より一四丁迄脚部に貼紙が

施されている。凡例で「継体帝ヨリ皇極帝マテノ年号ハ釈家ノ偽号ナル由ハ余カ紀号三辨ニ述タレハコ、ニ記サス」等、「詳ナルコトハ三辨ニ就テ見ツベシ」と記されている。

信名は史書に通じ和学講談所で埒保己一を助け、「群書類従」

の編纂校訂に力を尽した。天保七年没、享年五十。ハ〇九一―

b―三―一 (追記二)

漢吳音図(序題)・漢吳音徴・漢吳音図説 太田〔全齋〕

(方) 文化一二年五月序刊 大三冊 著者自筆訂正書

入本

後補茶色表紙(二八・二×一九・一糎) 双边刷粹題簽に「漢

吳音図 上」―書「漢吳音徴 中」―刻「漢吳音図説 下」―刻

とあり、中・下題簽には「天与馭則与／貧 太田方記」の朱印

を鈐す。扉左に「漢吳音図」と、右に「是ヲ入て残り三十丁ニ

なりト／表紙五十枚」と書さる。文化十二年(右傍に乙亥と朱

書)五月 福山太田方撰「漢吳音図序」二丁。序文中の一字は

朱にて、三字は胡粉にて塗抹訂正され、次掲修本では此訂正通

りに修刻されている。「図徴凡例」三丁、此朱訂部分は修本も

そのままながら、胡粉塗抹訂正部分は修刻されている。内題な

く本文四五丁、図表形式、单边(二四・三×一七・七糎)、襷

紙に裏打さる、原料紙約二六・二糎。裏打時に剝がれた押紙を一まとめにし包紙に挿入されている。

第二冊「漢吳音徴／福山 太田方述」と題す。単辺（二〇・五×一六・四五糎）無界一〇行小字双行。漢字片仮名交り文にて解説を施す。版心白口、「漢吳音徴 丁附」。「尾題」「漢吳音徴 終」。全四八丁。巻末に「四十八」と書す。本文墨格多し。

第三冊「漢吳音図説／福山 太田方述」と題す。単辺（二七・〇×一六・六糎）無界一〇行、漢字片仮名交り文、注小字双行。版心白口、「漢吳音図説 丁附」。「尾題」「漢吳音図説畢」。尾題の前に「此彫工初刷之冊子」と、巻末に「廿三」と書入らる。全三三丁。上部裁断さる。全齋朱印の他「飯田氏／家藏」の朱印、「下総／並木／へ堤字左衛門」の墨印を鈐する。

朱墨黄筆にて著者の自筆訂正詳密で、特に第一冊に多い。次掲日尾荆山の書入は全齋の書入を移写したものが、本書の方が稠密で、恐らく終生訂正を重ね、書加えていったものであろう。次掲の修刻本での改訂は未だ少部分にとどまるが、通修本ではかなり全面的に改められている。しかし部分的な入木による改刻であり、全てが本書書入の訂正通りになっている訳ではない。

全齋は福山藩儒、文政一二年没、享年七十一。その著「韓非

子翼蠹」を木活字で刷印せんとしての十年に垂んとする惨憺たる苦辛はよく知られている。東条義門や岡本況齋と親交があり、浜野文庫には況齋の「漢吳音図補正」の写本も存している。ハ
〇九―b―四―三

又「修」大三冊 日尾荆山移写太田全齋書入本

紺色空押唐菱文様表紙（二六・九×一九・九糎）双辺題簽に「漢吳音図 上」「漢吳音徴 中」「漢吳音図説 下」と刻さる。

第二冊見返に単辺の弘め（広告）を貼附。「至誠堂／臧書印」

（荆山）「宇埜氏／図書印」「洒竹文庫」朱印押捺。大野洒竹旧蔵。巻末に「日尾荆山先生手入本」と書さる。学習院の双辺有界白口九行野紙等に書かれた近人の書入も挿挟まれている。

荆山は江戸の儒者で亀田鵬齋門、安政六年没、享年七十一。

尚浜野知三郎氏はこの同郷の先学の著書を大正四年一月東京の六合館から出版している。此は本文庫ハ四七c―一八―三の函架番号が附される通修本を底本とし、音図は影印他は鉛印で翻字し、その補説である「音徴不尽」「同窠音図」「音図口義」「全齋読例」の四書を同じく翻字して附し、半紙本六冊としたものである。本文庫蔵本には刷印時の印刷底本となした指定の語が朱筆で書込まれている。

本書また通修本を影印に附し、林史典氏の解説を附したものが勉強社文庫に編入せられ、修刻箇所や学史上の位置にも触れている。今図書館等の整理の参考に修刻箇所を一点宛挙げておく。

〔修本〕―「漢吳音図」第十七から第二十まで、「外転」を「内転」に改める。

「漢吳音徴」第七丁裏に標注を加う。

〔通修本〕―「漢吳音図」内転第一の仮名表記「蓬ヒヨウ・

東チヨウ・公キヨウ」等を「フヲウ・ツヲウ・クヲウ」と改む。

「漢吳音徴」第一三丁裏「許」字の解説を「愚按」の前二行に亘って墨格に改む。ハ〇九―一b―五―三（追記三）

干禄字書 唐顔元孫 文化一四年刊 〔修〕（官版ハ江戸

浅倉屋久兵衛） 大一冊 覆清 移写小島成齋校合

書入本

朱色表紙（二五・七×一七・四糎） 双辺題簽「干禄字書」。

朝議大夫滁沂豪三州刺史上柱国贈秘書監顔元孫撰第十三姪男金紫光禄大夫行湖州刺史上柱国魯郡開国公真卿書「干禄字書」

〔序〕九丁に続け、第一〇丁より「平声」と題して本文に入る。

左右双辺（一九・四×一二・八糎）無界四行七字小字双行。版

心白口双黒魚尾、中縫に丁附。尾題「干禄字書終」。尾題次行に「有唐大曆九季歳／次甲寅正月庚子／朔七日景午真卿／於湖州刺史宅東／序院書之」と刻し、珣祐丁巳嘉平郡文学衡陽陳蘭孫書〔跋〕を附す。跋末に「文化十四年刊」の刊記が刻され、裏表紙見返に「書林／江戸日本橋通一丁目 須原屋茂兵衛／同浅草茅町二丁目 須原屋伊八／大坂心齋橋通り 河内屋喜兵衛／東都浅草広小路 浅倉屋久兵衛梓」の単辺奥附を貼附。全五二丁（跋文第五一丁裏より）。

文字通り禄を干むるの字書、すなわち科挙用の受験字書で、韻によって文字を排列し、字母夫々の正・俗・通体が掲出されている。最も簡便且実用的な字体を知る字書で、顔真卿の書の摹刻本である意味も大きい。

「干禄字書」は本版刊行以前既に宝永四年一月跋刊本（〔京〕井上実秋閑）寛延三年三月刊本（〔京〕井上忠兵衛）の二版が存する。此等は説郛所収本の翻刻で、陳蘭孫の摹刻本（此系統に清馬日路刊本あり、「官板書籍解題略」は本版の底本なりとす）系とは異なる。本官版は「文化十四年丁丑新鐫／学問所御蔵板／製本頒行所 江戸横山町三丁目 和泉屋金右エ門」の単辺壳捌奥附を附す刻本が「漢字入門―『干禄字書』とその考察―」と

題して、杉本つとむ氏の解説を附し早稲田大学出版部より昭和四七年五月に影印刊行され、後増修版が印行されている。また単辺売捌奥附「御書物師 横山町彦丁目 出雲寺万次郎」を貼附せる刻本が同氏の編になる昭和五〇年八月刊「異体字研究資料集成」別巻一に影印されている。両者共修刻のない早印本である。本版の修刻箇所は「漢字入門」の資料中に掲げられているが、一例を挙げれば第三八丁裏「介^{上通}下^正」の空格部分に通体の介を加刻している等である。本版恐らく後出の官版「五経文字」「新加九経字様」と共に、馬氏叢書樓刊本を覆刻したものであるろう。

本書入は尾題後の真卿識語の下に「安政二歳次乙卯二月晦日依／先師本校合」と朱書してある如く（また本稿後掲ハ〇九一―一b―三―参照）、狩谷棧齋蔵の石本・説郭本・本初刻本（和泉屋金石右エ門売捌本）と朱筆で校合している。初刻本の表記は貼紙に記されていることが多い。前述の「介」の箇所には「再刻ノ際加入セシナリ」と記す。蓋し移写者の為せる業ならむ。

書入は字体の微細な線や角度に至る迄朱を入れ、眉上・行間・脚欄等にまます考証が加えられている。これらは筆者を記さぬが、次掲本の「成斎曰」等の書入と殆ど一致する。しかし次掲

本の第二四丁表に存する「知足按」の按語二条は本書には存しない。又次掲本には初刻本との校異、「安政二云々」の巻末の朱書も存しない。本書入は国会図書館の自筆書入本、また後述「新加九経字様」の書入との比較等から移写本と思われる。国会図書館本は眉上・欄外に考証書入稠密で、本文庫本は両者共移写は本文のみに止まり、墨筆のそれら書入迄は及んでいない。本帙次掲書よりやや刷が悪い。

成斎は福山藩儒、文久二年没、享年六十七。書家としても名高い。「干禄字書辨疑」の著がある。ハ〇九一―一b―六一―

又 「修」(官版) 大一冊 移写小島成斎校合書入本

縹色布目表紙(二五・八×一七・九糎) 双辺題簽に「干禄字書」と刻す。題下に「石本校勘」と朱書。巻頭匡郭外に「金石粹編」より引いた「碑下截断欠凡両面一高七尺八寸五分一高六尺九寸七分俱広四尺七寸五分書分五層三十三行／行九字正書額題顔氏干禄字書六字篆書在瀧川府金石粹編」の書入あり。書入は前掲書とはほぼ同じけれど小異あり、前掲書にある序文の朱句点は本書にはない。また同文のものもその書入られた位置に違いのあるものがある。本書では「成斎曰」「知足按」等と按語の人名が記載されている。「杉園臧」の朱印を鈐す。小杉杉園旧蔵。

ハ〇九―一b―七―一

魏武帝註孫子三卷 魏武帝撰 岡〔龍洲〕〔白駒〕校

宝曆一四年二月序刊 〔明治〕印（京 平樂寺村上勘

兵衛） 大一冊 江木鰐水書入本

香色表紙（二五・一×一八・〇糎） 双边香色地題簽「魏武注

孫子」。表紙右肩に「江木鰐水名載書入本」と書し、その下に

「山陽門人／長沼流兵法／之達人」と三行に誌した紙片を貼附

す。宝曆甲申春二月岡白駒撰「魏武注孫子序」三丁、宝曆閏逢

涪灘仲春河子龍撰「刻魏武注孫子叙」通一〇丁、末に「右魏武

自撰小序偶闕漢魏名家集獲之因并附載於茲河子龍識」と刻し下

に「大平御覽載此序」と鰐水書入の存する「孫子兵法序」通一一丁を冠

せ、内題「魏武帝註孫子卷上（之中・之下）／岡白駒校正（上

のみで、中・下にはなし）。单边（一九・九×一四・三糎）有

界八行一七字小字双行。訓点・送り仮名・音訓合符・句点附刻。

版心白口单黒魚尾、上象鼻に「魏武注孫子」と刻し、魚尾下に

「卷之上（中・下）。〇丁附」。尾題「魏武帝註孫子卷之上終（中

畢・下畢）。单边奥附「書林 京都東洞院通三条上町 平樂寺

村上勘兵衛」。裏表紙に「本／石井蔵書」と墨書あり。本文上

一〇、中一〇、下一二丁。

本書は武帝注孫子の本邦初の開版で、序に云う如く、肥前蓮

池藩侯が藩士の献じた本書を、藩儒岡龍洲・河野恕齋父子に命

じて校刊させたものの後印本である。奥附から見て刷印は明治

にかかるか。武帝注の孫子は後平津館叢書本を翻刻した官版も

刊行せられている。

朱墨書入周密で、「馘云（案）」「山陽翁」「赤城翁云」「直解

云」等自説や師山陽また徂徠等の説を引き、和漢の書からの引

例も多い。「小田右府与斉藤竜興戦」「武田勝頼之亡是耳」「大

坂夏役幸村之謀」「小田原之役」「関原大捷」「黒田孝高論小早

川秀秋」「楠公」「石田三成」「長湫之役」「謙信攻加賀松任城」

「楠正行」「以巖島之役」等、文中の語に本邦の故事合戦の場面

を想起しあてはめたものも多い。

江木鰐水は福山藩儒医、明治一四年没、享年七十二。ハ〇九

―一b―八―一

大広益会玉篇三〇卷 梁願野王撰 唐孫強補 「宋陳彭

年」等奉勅重修 天保五年刊（官版） 大三冊 覆清

森枳園等書入本

焦茶色空押雲型文様表紙（二五・七×一八・一糎） 单边題簽

「古本玉篇 上（中・下）冊」。康熙四十有三年六月既望 南

書房旧史秀水朱彝尊序時年七十有六「重刊玉篇序」を冠せ、
「大広益会玉篇」一部并序、凡三十卷」と題し、眉上に「森約之案
此六行唐孫強牒文」と書入のある牒文を挟んで本文に接続する。

内題「玉篇上（中・下）十卷」（上・下には所收部数刻さる）。

左右双辺（二〇・四×一四・八糎）有界一〇行二〇字小字双行。

版心白口单黒魚尾、魚尾下に「篇上（中・下）丁附」。尾題

「玉篇卷第十（二十・三十）」上・下冊には「新加偏旁（下は
傍に作る）正俗不同例」「類隔更音和切」を附す。下冊には更

に「分毫字様凡二百四十八字」、「沙門 神珙 撰」と題する「五音

声論：五音之図・四声五音九弄反紐図并序」を附す。末に、呉郡

查山六浮閣主人張士俊拜手而識之如左「跋」一丁あり、末行に

「天保五年刊」と刻さる。序を除いて上二〇二丁、中八八丁、

跋を除き下八二丁。「禾ノ濤」（陰刻）「森ノ氏」の朱印、「天艸ノ

廬」の陰刻茶印を鈐し、「森約之ノ最善物」の約之の手書がある。

本書は跋にある如く清張士俊が覆刻した「沢存堂五種」所収

覆宋版の更なる覆刻である。序跋によると、常熟の汲古閣毛扆

の手に入れた宋版で、未だ陳彭年の奉勅重修のいらぬ所謂上元

本かと述べているが、本書また重修本である。顧野王の原撰本

孫強補編の上元本は彼土に佚し、残存七巻のみが我国に伝え

られている。玉篇は説文の部類を増改し、類書的な要素を加味
して編纂された字書で、既に五山版の刊行を見、江戸初以後諸
版が多い。

本書入は立之・約之父子二代に亘り、眉上に案語を加え、宋
板と朱筆で校合が為されている。「目」字の項には「嘉永辛亥ノ
春月森約之考」なる考証も存し、特に木部・艸部・虫部等本草
学に関する部には朱にて圈点の打たれた箇所が多い。

森枳園本稿（一）に既出。ハ〇九一―一b―九一三

禁秘抄三卷 順徳院 「江戸初」刊 慶安五年七月印

（京 田中理兵衛） 大三冊 壺井義知書入本 松平

定信旧蔵本

香色表紙（二六・五×一七・三糎）に直に「禁秘抄上（中・

下）」と書す。各冊巻頭に「禁秘抄卷上（中・下）目録」二丁

（中は一丁）。内題「禁秘抄卷上（中・下）」。双辺（二〇・四

×一四・五糎）無界八行一七字。訓点・送仮名・音訓合符・句

点附刻。版心粗黒口双花魚尾、中縫に「禁秘抄上（中・下）

丁附」。尾題「禁秘抄卷上（中・下）終」。本文末に「順徳院御

抄云々」と刻し、「本云禁中抄三卷ノ正和五年五月十五日申出禁

裡御本ノ密々書之可秘々々ノ文明九年四月初染筆五月中旬終写

功了本不審仍少々雖加推量写之猶以不及料簡之所々有之以善本可令校合^已而特進通秀の本版底本の奥書を刻す。刊記は原の双辺木記を削去した痕跡あり、「慶安五年孟秋吉祥日／小川通一条上ル町／田中理兵衛改板」。目録を除いて上二三、中二八、下四三丁。下第五丁補写。「楽亭文庫」「桑名文庫」「立教館／函書印」「温故／知新」「臧春／閣函／書印（陰刻）」「白／河」「桑名」の各朱印と「好谷堂／函書記」茶印が鈐さる。写本を用いて入紙がなされている。

有職故実の書で、近代に至って乱れることの多くなった宮中の作法を、平安の盛時と比べ批判している。本版は正保版が「国書総目録」に著録されるが、お茶の水図書館蔵の該本は刊記を削去せし後印本で、正保は書入による著録である。本書また「御書物屋 京都二条通富小路東入町 吉田四郎右衛門版」と加刻せる後印本が存する。

本書の書入は、本版の底本となった奥書の初二行を「通秀本ニ无」として抹消し、次に「一本」と誌し、訓点・送仮名を加え、「自筆本校合」として、「特進通秀」に「正二位下也／中院源通秀／本名通時／長亨二薨于時従一位／内大臣」と朱書されている。また「一本奥書／右鈔書写事蒙鳳命之儼染免毫之拙

雖遂再校猶多訛謬者乎于時文明／十一歳 応鍾上辭謹記之／

従一位政嗣上（以上墨書）「一本／此御鈔借兼滿本令書写之如形馳禿毫／之間不可有外見者也／ 文龜二年五月日／ 参議右大弁実秀／ 亨禄四薨于時従一位准大納言」とある本と校合し、裏表紙見返に「壺井義知校再校了」と朱書されている。中卷末にも「再校了」とある。卷上巻頭「禁秘抄」の秘と抄の間に「御」を入れ、題下に「一本建曆御記」と書入がなされている。朱筆で校合がなされ、人名・官職等を注解し、典拠引例また周密である。眉上に「朱云」「青云」「墨云」等として先人の説を転記す。押紙あり。本書の伝存本には義知注を転写したものが多い。

義知は故実家、一時四辻家に仕う。京で講じ門弟が多い。万事好事・秘事の感のあつた有職学に始めて文献実証の風をあてんとした。享保二〇年没、享年七十九。ハ〇九一一一〇一三

江家次第第二卷（一六・二二原欠） 大江匡房 承応二年四月跋刊 大一九冊 移写橘経亮等校合書入本

渋引刷毛目表紙（二六・七×一八・五糎）双辺題簽「江家次第」。題下に「一（一廿）」と書す。「江家次第目録」七丁。「江家次第卷第一（二・四・六・九・十一一廿）目録」通八丁、目

録は各巻頭に一丁宛あり。「江家次第巻第三目」「江家次第巻第一
五(七・十)」「江家次第巻第目録八」。内題「江家次第巻第一
(三十二十)」「江家次第巻第二」。双辺(二二・四×一四・五糧)
無界一〇行二〇字小字双行。訓点・送仮名・音訓合符・句点附
刻。版心粗黒口双花魚尾、中縫に「江次第幾 丁附」。尾題「江
家次第巻第一(三十五・七・十一十三・十五)終」「江家次第
二」「江家次第巻第六(九・十七・十八・二十)終」「江家次第
巻第八」「江家次第巻第十四終」「江家次第巻第十九之終」。承応
二癸巳孟夏吉旦 洛下 蓬生巷林鷓〔跋〕。各冊丁数目録共、卷
一一五八、卷二一五六、卷三一四三、卷四一六七、卷五一六
六、卷六一五九、卷七一三四、卷八一四三、卷九一三八、卷一
〇一五八、卷二一一二九、卷二二一三九、卷二三一二七、卷一
四一四〇、卷一五一三六、卷一七一四二、卷一八一二八、卷一
九一三九、卷二〇一三七丁。卷二等五箇所ほどに他本よりの写
しを綴加えている。「由清ノ之印」「月の屋」二顆の朱印を鈐す。
横山由清旧蔵。

有職故実書。本版によって始めて刊行された。本書の書入は
朱墨緑の三筆で校合や典拠引例按語等周密である。押紙あり。
「経亮云」「文按」「以文按」「山本」「義按」「幹按」「宗直云」

「宗建卿按」「宗恒按」「宗恒朝臣曰」等の按語が移写されてい
る。各巻末の校合識語を記せば、卷一「校訂畢 経亮ノ(以下
朱書)寛政五三廿三一読了 香杲ノ同九十二朔 藤貞幹本一校
了ノ(裏表紙見返に)延享二乙丑天四月二日以或本^{正親町}正訛謬令一
覽畢ノ又以大江俊章正本直之ノ 国栄ノ経亮云国栄ハ岡崎殿
也」、卷三朱書「橋経亮校訂」、卷四・五・一二・一七・一九
「校訂了経亮」、卷一三・一四同上朱書、卷六・一五「校訂橋
経亮」、卷七・八「校訂経亮」、卷一〇・二〇「校訂了橋経亮」、
卷一一「校訂 経亮」を朱筆にて抹消し「山本二本校合了」と
朱書、卷一八「校訂経亮」。

「広橋家古本ノ目録如此」とし「江家次第巻第十六」等の記
載もある。書入は経亮の字に似るも、山本も経亮も同筆で押紙
も新しく、校合書入を移写したものであろう。

橋本経亮本姓橋氏、国学者にして故実に詳しい。文化二年没、
享年四十七。ハ〇九一b一一一九

古今和歌六帖六卷(一之上欠) 寛文九年春刊〔修〕

(〔京〕 吉田四郎右衛門) 大六冊 移写寛政一年賀茂
季鷹令移写釈契沖校合書入本

縹色布目表紙(二六・一×一八・五糧)第一冊欠。「古今和

歌六帖一之下(二一四・五八六V之上下)の貼題簽。内題「古今和歌六帖第二(一六〇)」。各巻頭に「目錄」一丁三丁を冠せ本文に接続する。単辺(二二・〇五×三三・三八)版心なく表裏通V(糎)無界一一行ほど、但し和歌の末を散らし書きにし、行数増えたる箇所あり。尾題なく、末に「嘉禄二年仲春下旬之候以民部卿本ノ書写訖此本有僻事之由被申之間ノ又以他本手自校合了ノ寛喜二年十二月十九日以入道右大弁ノ本重校了件本者家長朝臣本ノ云々ノ在判ノ前和哥所開円從四位上源朝臣」の底本奥書を刻す。刊記「寛文九己酉年春帰吉日 吉田四郎右衛門板開」とあり、恐く「板」の上に刻されし一肆を削去せしものと見ゆ。第一冊三一丁、巻二目共四一、巻三同三二、巻四同三九、巻五同六五、巻六同七一丁。「煥章閣」の朱印を鈐す。(追記四)

本書は唐白居易の撰になる作詩作文用の類書である「白氏六帖事類集」に倣い、「和名類聚鈔」の分類法をも援用して作られた類題和歌集で、本版により始めて刊行された。書肆吉田四郎右衛門は正保四年三月に廿一代集の大著も刊行している。

書入は、本版底本奥書の刻されている箇所に「寛政元年以契沖師校本令校合且聊加ノ愚案早ノ賀茂季鷹」と朱で記されている如く、「鷹案」「契云」の案語が眉上に見え、第一冊桃・第

二冊朱・第三冊藍朱・第四冊藍・第五冊朱(下桃)・第六冊朱で校合書入がなされ、二〇二廿二―二〇四四「三百六十三―五百十八」には分類された歌題に墨筆で番号が附されている。季鷹の案語や識語も他の校合書入部分と同筆であり、移写本と見てよからう。

契沖は元禄一四年没、享年六十二。「和歌拾遺六帖」の編著がある。

賀茂季鷹、上賀茂神社祠官で国学者。天保二年没、享年八十八。ハ〇九―一b―二一六。

古今著聞集二〇巻 橘「成季」(南袁) 元禄三年一月刊

〔修〕 明和七年三月印 〔後印〕 (大坂 崇高堂河内

屋八兵衛) 半二〇冊 絵入 移写小中村清矩等校合

書入本

浅葱色表紙(二二・四×一五・六糎) 双辺題簽「古今著聞集

一(一七)」。于時建長六年応鐘中旬散木士橋南袁愁課小童猥叙

大較而已「古今著聞集序」一丁。口絵(版心又一)一丁。「古

今著聞集惣目錄」通三丁。内題「古今著聞集卷第一(一七)」。

単辺(一六・三×一三・〇糎) 無界一〇行、漢字平仮名交り。

版心白口、「古今巻幾 〇丁附」。尾題「古今著聞集卷之一(一

二十)終。卷二〇本文に続けて第三九丁裏・第四一丁裏に
 「跋」二則あり、末に「建長六年十月十七日宴後朝右筆／記之
 ……」とあり。次に底本奥書「曆応二年十月十八日染六旬之老筆
 ／終二十帖之写功早且為休當時之徒／然且為備後日才学也可秘
 藏々々／老桑門在判」を刻す。刊記「元録^{（元禄）}三庚午年正月開板／
 明和七庚寅年三月求板／大坂書林 心齋橋筋順慶町 柏原屋清
 右衛門／同 河内屋茂八」。次に「崇高堂藏板目錄 大坂心齋
 橋筋南久宝寺町 河内屋八兵衛」一丁を附す。全卷丁数以下の
 如し。挿絵丁は「又幾」とあり⊕幾として表示す。卷一―通二
 七⊕二、卷二―四四⊕二、卷三―二五⊕二、卷四―一八⊕二、
 卷五―六四⊕三、卷六―四〇⊕四（第一三丁表第六行「院」字
 墨格）、卷七―一四⊕二、卷八―三〇⊕二、卷九―一八⊕二、
 卷一〇―二六⊕四、卷一一―二七⊕二、卷一二―三二⊕四（第
 八丁が誤刻され二丁あり、次掲書では始めの第八丁は補写なり、
 或いは補刻せしか。挿絵の又廿五丁は卷一一に綴すべきもの、
 次掲書では卷一一にあり。⊕四は此等を含みし丁数）、卷一三
 ―一九⊕二（但し第二〇丁二枚綴じらるるも丁数から除外す）、
 卷一四―一九（本来此卷にあるべき「又四」を次卷に誤綴、次掲
 書では本卷にあり）、卷一五―二四⊕四（但し「又四」誤って本

卷にあり）、卷一六―五四⊕二、卷一七―二五⊕二。卷一八―
 一八⊕二、卷一九―二二⊕三、卷二〇―四二⊕五。「杉園藏」
 「浜／野」朱印を鈐す。小杉杉園旧藏。（追記五）
 「古今和歌集」の体に倣った本朝の説話集で、本版により始
 めて刊行された。各冊の校合識語を記せば（朱書、△／内代
 緒・卷六以下藍書）、一「以小中村氏藏本及△木村氏所藏古写
 本△一校」、二「以小中村氏所藏本及△木村氏所藏古写本△校
 一校了」、三「以小中村氏所藏本及△木村氏所藏古写本△校
 合了」、四「以小中村氏所藏本及△木村氏所藏古写本△一校了」、
 五「以小中村氏藏本及△木村氏所藏／古写本△一校△傍△書了」。
 書入以下別筆か、六「慶応四年八月五日以紀州家御本及△木村
 氏古本△校合訖」、七「慶応四年八月五日以紀州家御本及△木
 村氏古本△校合了」、八「慶応四年八月五日以紀伊（伊州の上
 に重ね書き）殿御本及△木村氏古本△校合了」、九「慶応四年
 八月九日以紀州御本及△木村氏古本△校合畢」、一〇「慶応四
 年八月九日以紀州御本及△木村氏古本△校合了」、一一「慶
 四年八月十二日以紀州御本及△木村氏古本△校合了」、一二「慶
 四年八月十二日以紀州御本及△木村氏古本△校合了」、一三
 「慶四年八月十四日以秘庫御本及△木村氏古写本△校合訖」、

一四「慶応四年八月十四日以紀伊御本及へ木村氏古本▽校合訖」、一五「慶応四年八月十五日以紀伊秘庫御本及へ木村氏古本▽校合了」、一六「慶応四年八月望以紀伊秘庫御本及へ木村氏古本▽校合了」、一七「慶応四年八月十九日以紀州秘庫御本へ及木村氏古本▽校合了」、一八「慶応四年八月十九日以紀州御本及へ木村氏古本▽校合訖」、一九「慶応四年八月十九日以紀伊御本及へ木村氏古本▽校合了」、二〇「慶応四とせといふ年の月廿日殿の御本とへ木村正辞の本▽とを見くらへて本文をたゞし書いれをはりぬ紀の殿人小中村清矩」。巻末に木村本の識語を以下の如く記した丁が綴加えられている。「木村本奥云（此のみ監書）／凡読書者、拘事則暗理、專理則疎事、何況泥文字言句者乎哉雖然／不著意於文字、則事理舛差、而不可為人之教誨、于茲著聞集者橘／成季朝臣之所以選述、而示模範於往時、遺鑑戒於後世、可謂奇宝／也、秋野本順英彦、使人騰寫、以為家藏、不才借之、看閱歷月、只恨文／字言句之脱落、英彦請予参考、於此覓得一本、略帰是正、猶未滿意／是歳之春登洛、乞得 飛鳥井垂相君雅章卿之秘本、考檢再三、墨以／補欠、朱以正訛、且分句読、頗擬証本、容易不可抹過、想夫校書如風／葉塵埃、随掃随有、疑者暫俟它日、於是乎跋／寛文十有

三載、龍輯癸丑、秋八月十又八日、涉禿筆于浪華城西之存／心軒、如松子、福住道祐、朱印アリ」。

すなわち後の南葵文庫本と木村正辞蔵本で校合し、「真年按」
「清云」等の按語を眉上に記載するが、始め巻一四第二丁に記入し、抹消して第三丁に書直してある「清云」の按語もあり、恐らくは自筆でなく移写本であろう。挿絵誤綴の箇所には新聞紙を破り「此処ノ挿絵ハ／十四卷ノ／又四葉に／つく」「此処にも凶あり脱丁／但シ凶碁打ノモノ」等と注記されている。巻五迄は眉上に朱で標目と為すべき事項を書入れてある。巻六を境として同系ではあるが校合底本も異り、書入の体式も異なる。別人の筆であろう。「イ」として緑や藍筆での校合も見られる。尚序に見える南葵は、著者名「なりすえ」首尾を音訳し唐めかしたものの。

小中村清矩、陽春盧と号す。遺稿や旧蔵書の大半は南葵文庫に入り、今東大綜合図書館に蔵せられる。本稿(一)に既出。ハ〇九一―b―一三―二〇

又〔修〕明和七年三月印（大坂 河内屋茂八・柏原屋清右衛門） 半合四冊 移写符合校齋校合書入本

濃縹色布目表紙（二二・〇×一五・五糎）黄色地双辺題簽

「古今著聞集」。題下に「卷三合」「六七八合」「十一二十三合」

「十六十七十八合」と書す。第一冊一神祇一五和歌、第二冊六管弦

舞一十馬藝同相撲強力、第三冊十一画図一十五宿執同闘浄、第

四冊十六興言利口一二十魚虫禽獸の目錄外題を表紙右に墨書。

刊記のみで奥附なし。「時々菴」の瓢形朱印押捺さる。

奥書「(朱書)校本云／是歳之春登洛乞得 飛鳥井亜相君雅章卿

／之秘本考檢再三墨以補欠朱以正訛且分／句読頗擬証本云／

(緑書) 以家蔵古鈔本校訂了丙寅夏日／ 校斎／(墨書) 以東

本願寺御門跡蔵弄再転之本校讎了／文化三年六月十七日 校斎

主人」。飛鳥井雅章本は前掲書木村本にも見える。本書入は朱

で句点をうち、緑筆(一部藍筆)で「大鳥武好曰」や「百鍊抄

云」等の典拠引例を掲げる。「望之按」の按語も見える。押紙

あり。「古今著聞集」は二書共書入はそれほど多くない。

狩谷掖齋本稿(一)に既出。ハ〇九一―b―三三―四

語孟字義二卷 伊藤〔仁斎〕(維楨)撰 林景范校 宝

永二年冬跋刊 「通修」 大二冊 有配 上移写猪飼

敬所書入・浜野知三郎校合本

紺色空押記つなぎ文様表紙(二七・四×一八・一糎) 双边題

簽「語孟字義上(下)」。「語孟字義目錄」二丁。目錄中に「附大

学非孔氏之遺書辨／附論堯舜既没邪說暴行又作」とあり。内題

「語孟字義卷之上(下)」。卷上内題に続いて前書あり、末に

「天和／三年歳在癸亥五月洛陽伊藤維楨謹識」と刻す。单辺(二

〇・〇×一五・三糎) 無界一〇行二〇字。訓点・送仮名・音訓

合符附刻。版心白口单黒魚尾、上象鼻に「語孟字義」魚尾下に

「卷之上(下) 〇丁附」を刻す。尾題「語孟字義卷之上(下)

畢」。宝永二年乙酉冬至日門人林景范文進頓首拜書「刊語」。上

四三、下四三丁。下第三一丁裏より附。下冊に「随分／庵蔵」

朱印を鈐す。

本書は性理学用語の定義集である宋陳淳の「性理字義」に仿

つたいわば古義学用語の定義集とも云うべき書で、本版刊行以

前の元禄八年五月に、書肆名を欠く古義堂の許可を得ぬ贋刻本

が江戸で梓行されている。本書は稿本を含む伊藤家歴代の書入

本が天理図書館古義堂文庫に今も存し、本版を翻印した「日本

思想大系三三伊藤仁斎伊藤東涯」に清水茂氏の解題が記されて

いる。本版には東涯の校訂による通修が施されており、それら

も此解題・頭注に示されている。修刻の一例を挙げれば卷上第

一九丁裏第七行「明道曰」が「程子曰」、同第九行「須菩提曰」

が「維摩所謂」と改められている。また通修本は卷上第二九丁

裏第三行「能識仁者」が「能知仁者」と改められている。営業書肆の営利出版ならざる個人や家塾・寺院・藩等の出版物には、こうした改訂がよく行われているので注意を要する。

本書上冊に存する書入は、本文庫別蔵〇九一―ト一二二―二文化一一年一月猪飼敬所（彦博）自筆書入本と比するに、その大部分と一致する。筆跡もやや乱暴ながら敬所の筆に似る。しかし本文庫前記別蔵本購入の折、本書は浜野氏の移写本と見、貴重書から普通書に函架番号を移した如くである。本書は私の見る所敬所標記の移写は上巻にとどまり、印記や小口書からも上下有配本である。ただ上冊巻末に「冬夜宿山家」と題する旧蔵者「磯野恭誌」の七絶が書かれ、下冊にも「此書明治十有六歳二月廿七日於福山岡本氏岡本夫子之賜我者也宜謹守不廢弁／明治十六載二月下澣 磯野氏（秋渚カ）所蔵の時点で既に此状態だったことが分る。刊語の裏丁に「大正四年九月尽日以秋旻山房蔵本校了」の浜野氏の朱書が見え、全巻に亘る東涯重訂の朱校（それほど多くは存しない）は浜野氏の筆だが、上冊の敬所標記の移写は恐く別筆であろう。敬所批校本が「日本儒林叢書」第六巻に翻印されている。

著者仁齋、京都古義堂堀川学派の祖。宝永二年没、享年七十

九。生前の刊行書は全て著者の承諾を得ぬ所謂贋刻本で、その著作は没後子息弟子達の補編祖述を經、古義堂より刊行された。猪飼敬所、弘化二年没、享年八十五、古義学より出て古注学を唱えた京の岩垣龍溪に学ぶ。他著への標記書入多く、それらを移写したものが多く伝存している。遺稿遺書は大部分が今京都大学総合図書館に蔵さる。元ハ〇九一―b―一四―二、今ハ二二F―a―八一―二

詩経〔集註〕八卷 宋朱熹〔清初〕刊 唐半六冊 寛

政二年夏藤原貞幹校合書入本

後補紙粉色表紙（二四・〇×一三・九糎）書題簽「詩経集注 藤原貞幹校一（一六）」。第四・五冊の題簽誤って逆に貼附さる。

香色原表紙右肩に「共四冊」と書し、左肩黄地題簽の上に、やや小振りの白色題簽を貼附し「詩経集注 天（地・元・黄）」と書さる。第五（書題簽「五」と題するも貼り違いにて、実は第四冊）・六冊は渋紙を以て原表紙に代う。淳熙四年丁酉冬十月戊子新安朱熹序「詩経集注伝序」三丁を冠す。内題「詩経卷之一（二・四一七）朱熹集伝（伝字、卷二一八は「註」とあり）」「詩経集注卷之三」「詩経卷八」。单边（一七・一八内上層一・九糎）×一一・四五糎）有界九行一七字小字双行。句点附刻。

上層に音注・校字等を刻す。版心白口「詩経 卷幾 小題 丁

附 名山聚（各巻頭にあり）。尚「名山聚」は序第一・二丁に

も刻さる。尾題「詩経卷之一終」「詩経集註卷之一（三・五

七）終」。第一冊卷一―一九丁卷二―四四丁、第二冊卷三―六五

丁、第三冊卷四―二〇丁卷五（途中迄）三二丁、第四冊卷五統

通八三丁、第五冊卷六―四〇丁、第六冊卷七―二九丁卷八―三

五丁。全巻襖紙に裏打さる。原料紙高約二二・三糎。「洒竹文

庫」朱印を鈐す。大野洒竹旧蔵。元四冊なりしもの改装。

巻末に「詩俗本其積音明人所挿入而非朱子／集伝之旧近日得

佳本復其旧／寛政二年歳次庚戌立夏日一校／左京 藤貞幹」

と朱書あり。校合の他朱墨にて、特に反切や語釈を書入た箇所

が多い。押紙あり、巻三途中迄ある墨書は別筆か。

本書は明末清初に輩出した五経四書の挙生用受験参考書の一

であらう。こうした類の書を現在多く所蔵しているのは、加賀

支藩大聖寺現加賀市立図書館で、約二〇〇点ほど蒐められてお

り、磯部彰氏の調査解題が富山大学人文学部紀要に収められて

いる。

藤原貞幹前出。ハ〇九―一b―一五―一六

袖中抄二〇巻 釈頭昭 慶安四年七月刊（二京） 丸屋庄

三郎） 大合五冊 移写清水浜臣校合書入本

後補藍色表紙（二七・五×一九・一糎）。「袖中抄目録」九丁。

「袖中抄第一（一―十二・十五・十六）」（巻五より改行し「目録」

と題さる）、「袖中抄／第十三（十四）目録」「袖中抄／第十七」

「第十八（十九）」「第廿巻」等とし各巻頭に目録一丁。巻五よ

り内題あり「袖中抄第五（一―二十）」と刻す。単辺（二〇・五

×一五・三糎）無界一〇行、版心なくまま裏丁一部表丁書脳中

央部に、単辺で「袖中幾ノ幾」と巻丁数が刻されているのが認

められる。尾題なく、巻末に次の底本奥書が刻されている。

「此袖中抄申書右府御本情他筆／令書写之以廿巻為五冊十七巻

極／藹源為仲十八巻予十九廿巻吉田／右兵衛督兼右卿等筆也／

（隔一行）／天文廿二年正月日 黄門都護郎言継」。次に刊語あ

り「右此袖中抄者古来和歌／道之奥秘而容易不流布／于世間之

本也雖然年久／罹蚕魚之患已欲泯滅故／寿于梓伝後世者也」。

末に双辺木記「慶安四曆初秋／丸屋庄三郎」。本文丁数、第一

冊巻一―三三・巻二―二六・巻三―二四・巻四―二七、第二冊

巻五―三三・巻六―二八・巻七―二九・巻八―二五、第三冊巻

九―三三・巻一〇―二八・巻一一―二四・巻一二―三〇、第四

冊巻一三―三六・巻一四―二八・巻一五―二九・巻一六―三

四、第五冊卷一七―二七・卷一八―三二・卷一九―三二・卷二〇―三五。「広岡文庫」朱印を鈐す。

三百餘の多数の歌語を、典拠を挙げ諸書諸説から引例して語義を明かした歌学書で、本版で始めて印行された。朱墨藍で校合書入がなされ、上層には典拠引例や「浜按」「広云」等の按語が見える。しかし卷一三以下には少い。恐らく旧藏者広岡氏の書入であろう。各冊頭の巻を除き、巻頭版心部表を朱で塗抹し「袖中巻幾」等と墨書(途中より欠)して標識とす。

清水浜臣、泊酒舎と号す、医家で国学者。文政七年没、享年四十九。ハ〇九―一b―一六―五

荀子二〇卷 唐楊倞注 延享二年秋序刊〔後印〕(京)

葛西市郎兵衛) 大10冊 覆明世徳堂刊本 移写古

屋昔陽等書入本

紺色表紙(二七・〇×一八・一糎) 双辺題簽「荀子全書」

序目(三之四・五之六・七之八・九之十・十一之十二・十三之十四・十五之十六・十七之十八・十九之廿終)。

双辺見返、枠上に「原本全註」と横

刻し「唐大理評事楊倞註／荀子全書／日本平安書林 翻刻」。

魁星像と「翻刻」の下に「其利／断金」の朱印押捺さる。延享

乙丑之秋播磨清絢撰「刻荀子序」四丁、享保乙巳十月望 三河

物茂卿題「刻荀子跋」三丁、時歳在戊戌大唐睿聖文武皇帝元和十三年十二月也「荀子序」三丁、「荀子新目錄」三丁を冠す。

内題「荀子卷第一(一二十)／唐大理評事楊倞 註」。双辺

(一九・五×一三・二糎) 有界八行一七字、句点附刻。版心白

口単白魚尾、上象鼻に「世徳堂刊」、中縫に「荀子巻幾 丁附」、

下象鼻に「宅」等の原刻工名をそのまま刻す。尾題「荀子

卷第一(二・四―十九)」「荀子卷之三」「纂図互註荀子卷第二

十」とあり。平安 葛応禎 謹題「跋」一丁卷末にあり。刊記

「延享二年乙丑夏六月穀旦／京白山堂 中根保之丞 法軸／平

安書林 葛西市郎兵衛好廷梓行／読荀子 但徠先生著 四冊出来」と刻さる。

跋者葛応禎すなわち刊行者の葛西市郎兵衛で、荀子関係の書物

をよく出版している。各巻丁数本文、卷一―二〇、卷二―二四、

卷三―三〇、卷四―二四、卷五―二二、卷六―二三、卷七―二

六、卷八―一五、卷九―一五、卷一〇―二三、卷一一―二六、

卷一二―二四、卷一三―二八、卷一四―一七、卷一五―二〇、卷

一六―二〇、卷一七―二二、卷一八―一八、卷一九―二八、卷

二〇―三一。「河辺／備印」の陰刻朱印を鈐す。巻頭に「雨森

信成」の、第一冊裏表紙に「元七郎読之」の墨書がある。

性悪説で有名な本書は、本邦への伝来は古きも餘り流行せず、

徂徠が尊んでより行われるようになった。序跋によれば、京の中根元珪が本書を刊行せんとしたが、時に全本乏しく荏苒として果さず殆ど三十年が過ぎたと云う。徂徠の跋は其折元珪に与えたものであろう。今清田儋叟蔵の世徳堂刊本を底本とし、本書を始めて梓行せんとした中根法軸の名も刻んで刊行したものであろう。

本文庫山城喜憲氏の調査によれば、初印本は本刊記刊行者に並べて「梅村弥右衛門武政(右)／江戸書店 梅村弥市郎富高(左)」が刻され、広告書は未だ刻されていない。此二肆を削去した葛西印本にも広告書を加刻せぬものがあると云う。因みに「読荀子」は明和二年の刊行である。

書入は周密で、「物云」「物氏云」「蘭陵云」等として徂徠や同学派の田中蘭陵の説を記し、「昔陽云(曰)」「鬲按」等として古屋昔陽説を書入れる。上層のみならずま脚欄にも為され、押紙もある。第一冊の「鬲按」の部分は殆ど全て胡粉で塗抹され其上から書かれており、恐く移写であらう。やや薄墨の別筆も交る、或いは雨森氏の筆か。(追記六)

古屋昔陽、熊本藩儒、文化三年没、享年七十三。本稿(一)「石室談草」にやや触れる所がある。ハ〇九一―b―一七―一〇

又 大10冊 第七・八冊補配 青山拙齋等校合書入本
紺色表紙(二六・二×一七・七纏)題簽同前(第七冊題簽脱落、第八冊「荀」のみ残存)。各冊朱にて目錄外題が書さる。
第五・六・九・一〇冊に卷子本型「水戸青／山氏蔵」の朱印、第七・八冊に「□田／代楽」の朱印を鈐す。

第七・八冊は他冊に比し刷ややよく、書入はあるが別筆で、「王三云」「盧云」「盧補公云」「泰山曰」等唐本からの引例多く、他巻とは異っている。青鉛筆で×印も附されている。他巻は朱で句読をうち、校字が行われ、緑筆圈点や藍書も見られ、押紙がある。少しく「延于云」等の按語も記されている。刊記の後に「天保己亥秋従家君祇役江邸借莫府騎士岡／本保考所蔵宋刻本校之其異者以朱字表之／延壽識」とあり、「〇宋本注十四字／在三問不对之／下」の如く校異が示されている。

水戸青山家代々の書入ある伝来本に、第七・八冊を補配したものであろう。青山延于、拙齋と号す、天保十四年没、享年六十八。延壽は拙齋の四男、鉄槍齋と号す、明治三十九年没、享年八十七。ハ〇九一―b―一八―一〇

楚辭一七卷 漢王逸注 宋洪興祖補注 清毛表校 寛延二年一二月刊(京 上柳治兵衛等) 大八冊 仮綴

覆清汲古閣刊本 渡辺樵山校合書入本

濃縹色表紙(二六・一×一八・一糎) 単辺題簽「楚辞王逸註

洪興祖補注一(二・三・四・自五・自九・自十三・十六)。題簽下に

「共八本」表紙中央に「久志」と墨書。「双辺見返」後漢王逸註

楚辞箋註／皇都書林印行。瑯琊王世貞撰廷襲写「楚辞序」

四丁、「楚辞目錄」二丁を冠す。内題「楚辞卷第一(一十七)八卷

一は内題下に小字双行注あり)／離騷經章句第一 離騷(小

題は卷二以後注者名の次行にあり)／校書郎臣王 逸上／曲阿

洪 興祖補注(卷二以下なし)と刻す。卷一七は内題次行に

「漢侍中南郡王 逸叔師作」と題さる。本文前に内題に続いて

目錄を刻す卷もあり。左右双辺(一七・九×一二・四五糎)無

界九行一五字小字双行、句点附刻。版心白口双黒魚尾、中縫に

「楚辞卷幾 丁附」、各卷首尾丁中縫には「汲古閣 丁附」と

刻す。尾題「楚辞卷第一(一十七)」但し卷八は最終行下端小

字双行注の後に「終」と刻するのみ。「汲古後人毛表字／奏(卷

三作「秦」)叔依古本是正」の単辺原木記(卷四・六・九杵な

し、卷五・七・一三・一七原本記なし。卷九は「古定是正」と

あり)を刻す。平安柳美啓識「跋」一丁。刊記「元文四年己未

九月 御免／寛延二年己巳十一月 発行／皇都書肆／中村治郎

兵衛／八尾平兵衛／西村市郎右衛門／中川茂兵衛／河南四郎右

衛門／植村藤右衛門／小林半兵衛／藤沢三郎兵衛／上柳治兵

衛」。各卷丁数本文、卷一―五八、卷一―三一、卷三―三五、

卷四―四五、卷五―一四、卷六―四、卷七―三、卷八―一七、

卷九―一九、卷一〇―一二、卷一一―五、卷一二―四、卷一三

―二五、卷一四―一〇、卷一五―一四、卷一六―三七、卷一七

―一七。「渡辺」「久志」二朱印を鈐す。「木村正辞歌集／櫛斎

後集」の双辺の袋が挿込まれている。

「楚辞」は朱熹の集註本が江戸初に刊行され、本補注本に統

いて寛延三年には王逸の章句本が板行されている。

本帙には以下の如く、各冊卷末匡郭外下端に校合識語が書入

られている。第二冊「弘化丁未二月十八日寓于聿修堂南窓下以

／春庵小島君所藏隆慶板膳本校訖／ 樵山外史 煇」、第三冊

「嘉永紀元陽月初三夜読訖于相陽浦賀之咬菜／精舎 樵山渡辺

煇」、第四冊「陽月七日夜半卒業前此二日授徒太劇且／飲客数

輩来拉予去妨礙清閑課業是／以後也 樵山魯書于浦賀咬菜精舎

之南／樓」、第五冊「陽月十八日読訖連日把酒晨夕昏昏／不遑劉

覽沈思也偷閑補課／不足贖酣醜之罪也／ 樵山魯題」、第六冊

「戊申十月念四読了于咬菜精舎／之晴軒 樵山魯」、第七冊「厥

明読訖／樵山坎、第八冊「予嘗寓于聿脩堂讀楚辭也以隆慶抄本離校僅止于離／騷九歌而客游于湘浦欲繼終其緒莫別本之可校因／誦讀之餘書一二管見以待他日之後考／嘉永紀元陽月念八題于浦賀之咬菜精舎／之南樓 樵山魯」。幕府医官多紀家の聿脩堂で、小島春庵（宝素）所蔵の隆慶板の謄本で校合したが全卷に及ばなかったことや、師の松崎慊堂に似て飲客と把酒し酣楽を尽しつつ、一方で小閑を得ては読書に励んでいる様子が窺われる。「隆慶重雕宋本八行十無也字」等の記載もある。緑筆圈点、不審紙あり。卷二迄は朱引、卷三より墨で行なう。「坎案」「坎謂」「原坎案」として案語を記す。第六冊より「魯案」も混ざるが「坎」と記すより少い。卷三迄は案語のみで校合は行われていない。

渡辺樵山、和歌山藩儒、明治六年没、享年五十三。ハ〇九一
一b—一九一八

大学発蒙 平賀〔中南〕（晋民） 天明五年春刊（日新堂蔵板八京 文台屋次郎兵衛） 大一冊 藤田幽谷書入本

濃縹色布目表紙（二六・四×一七・九纏）双辺題簽「大学発蒙」。見返に「藤田幽谷旧蔵／幽谷自筆書入四ヶ所」と書する

貼紙あり。卷頭「大学発蒙／皇和 安藝 平賀晋民房父 著」と題す。单辺（一九・七×一三・九纏）有界一〇行二一字。解文低一格、訓点・送仮名・音訓合符・句点附刻。版心白口单黒魚尾、上象鼻に「大学発蒙」、魚尾下に「丁附 日新堂蔵（巻頭卷末にあり）」と刻す。尾題「大学発蒙」。尾題前に「大学旧文」を附す。单辺奥附「日新堂蔵板／天明乙巳春／京堀川通錦小路上町 文台屋次郎兵衛発行」。全二四丁。「梅巷／函書」の幽谷朱印を鈐す。

本版京都大学谷村文庫本には「中南先生著／大学発蒙／皇都書肆 臨泉堂発行」の双辺見返が存する。幽谷の書入は「礼記曰」等の典拠引例の他、朱にて所々に圈点が施されている。

藤田幽谷、水戸藩儒で東湖の父、文政九年没、享年五十三。著者中南、寛政四年没、享年七十二。著作は地元の三原市立図書館にかなりまとまって収められている。ハ〇九一—b—二〇一一

日本書紀三〇卷存神代二卷 〔舎人親王等〕奉勅編

〔寛永〕刊 〔修〕 大二冊 覆古活 小山田与清校合書入本

香色刷毛目表紙（二六・一×一八・二纏）双辺題簽「日本書

紀」と刻し、題下に「(一)(二)」と書す。卷頭「ヤマトノミナモキノソノイテ日本書紀卷第一

(二)ノ神代上カミコノカシノマキノモノマキ(下)」と題するも、胡粉で塗抹し墨筆で訓

みを改めているので不分明。卷一は内題下に小字三行、小題下

に同二行に訓みを刻すも、胡粉で塗抹し、其上に書入が為され

ており同じく判読不能。双边(二二・〇×一五・七五糎)無界

八行一八字小字双行。訓点・送仮名・総振仮名附刻。版心粗黒

口双黒魚尾、中縫に「日本紀幾丁附」。尾題「日本書紀卷第

一(一)終」。卷一―四二、卷二―三八丁。卷一第三三―三六

丁单边。卷二第一九丁表初行に大墨格あり。天地裁断さる。

日本書紀の刊本は慶長以来多いが、本版は古活字を覆刻し卜

部家系の訓点を加刻せる寛永版の後修本ならむ。(追記七)

第一冊見返に紙を貼り扉の如くし、以下のように記さる。

「惶根草六 神代卷講述抄五ノ藻塩草六 神代卷塩土伝五ノ真

指抄ノ(以下。印のみ朱書)。禁中御本校了ノ。春海本校了ノ。

書紀集解校了ノ。积日本紀校了ノ。日本紀通証校了ノ。日本紀

纂疏校了ノ。類聚国史校了ノ。旧事記校了ノ。古事紀校了ノ。

神代口訣校了ノ。合解校了ノ。熱田神宮本校了ノ(以下下段に

書す)書紀集解校了ノ一写本校了ノ類聚神祇本源校了写本十五卷
度会家行撰

(注朱書)ノ松屋主人」。また第二冊見返には「禁中御本校了ノ

积日本紀校了ノ纂疏校了ノ春海本校了ノ旧事記校了ノ古事記校
了ノ古語拾遺校了ノ神代口訣校了ノ合解校了ノ集解校了ノ通証
校了ノ類聚国史校了ノ(以下下段)熱田神宮本校了ノ一写本校
了ノ松屋主人」。

板本の訓みを胡粉で塗抹し、朱墨緑藍で校合して改め、注記
・引用・按語等まことに周密である。不審紙・押紙あり。眉上
に「宣長曰(云)」「契沖曰」「与清按」「春海曰」「延佳曰」「勝
美曰」「真淵曰」等の按語を載せるが、第二冊第一八丁より此
等の眉上書入は存せず本文の校合のみとなっている。書入れは
与清の自筆と見てよい。

松屋主人、国学者小山田与清、弘化四年没、享年六十五。ハ

〇九一b―二―二

夫木和歌抄三六卷目錄一卷 藤原長清 寛文五年一月刊

(京 野田庄右衛門) 大三七冊 卷一補写 明治四年

二月大島為籠移写契沖・小沢蘆庵校合書入本

紺色表紙(二六・九×一八・一糎) 貼題簽「夫木和歌抄二

卷二(一卅六 雜十八)」と刻す。第一冊(目錄)・卷二四題簽剝

落。卷一書題簽「夫木和歌抄一 卷二」。首冊「夫木和歌抄目錄」

一四丁、長清法名蓮昭「跋」二丁。卷一補写、内題「夫木和調

抄卷第一／春部一」と題し、目錄半丁あって本文に入る。無辺無界一〇行、字面高約二〇・八糎。尾題なし。本文三七丁。板本の写しならむ。

以下板本、内題「夫木和哥抄卷第二（五十七・九・十一・十四・十六・廿三・廿六・廿八・卅一・卅二・卅六）」「夫木和歌抄卷第三（四・八・十・十五・十七・十八抄の字なし）・十八・廿二・廿四・廿五・廿七・廿九・卅・卅三・卅五）」「夫木和哥抄卷第卅四」。各卷内題後に目錄半丁一丁半あり、本文に入る。無辺無界一〇行、印面高約二〇・七糎。まゝ裏丁書腦中央部に、単辺「夫卷幾丁附」と刻されし丁合が見える。尾題なし、「跋」に続いて「寛文五乙巳年正月吉辰／烏丸通下立売下ル町 野田庄右衛門板行」の刊記あり。各卷丁数本文、卷二一三六、卷三一四五、卷四一五七、卷五一三八、卷六一三九、卷七一四七、卷八一六一、卷九一五六、卷一〇一五六、卷一一五六、卷一二五六、卷一三三五〇、卷一四一四九、卷一五一三七、卷一六一四四、卷一七一四五、卷一八一五六、卷一九一四六、卷二〇一四四、卷二一七四、卷二二七二、卷二三一六九、卷二四一五九、卷二五二六八、卷二六一六三、卷二七一七三、卷二八一五一、卷二九一五三、卷三〇一四三、卷三一六五、卷

三二一五三、卷三三一五四、卷三四一六〇、卷三五一三六、卷三六一六五。卷二九の後表紙裏貼りに漢籍の、同三〇の裏貼りに歌書の刷り反古が使われている。卷三六は水汚のため裏打されている。卷頭押捺の朱印（卷一にはなし）抹消さる。

長清の跋に「此鈔之名を思案して少しまゝとろみて有ける夢の中に……白衣之老翁一人来曰」と、白衣之老翁（大江匡房）より扶桑集という大層な名を与えられた。「此由を次日我黃門為相卿に被申ければ為相卿此事希代不思議之靈夢末代之希特誠に我朝之閑秘針也但扶桑名日本国総名也可有其源扶之字之つくり桑之字之木を取合て夫木和歌抄と名付」くべしと。

本書は本版によって始めて印行された。老大な量であり、延宝以後抄出本も刊刻されている。類題和歌集として他の歌書類に見られぬ珍しい歌も拾われている。奥に「此全部契沖阿闍梨考訂し置給へる正本四天王寺の去方に／有しを小沢翁写し置て猶証哥のより所あるを増補し／名所は和名抄ニ依而訂正し給へる乞需て悉誤字を正し／早ぬ此本写字烏焉の誤不少今以校正セリ朱字ハ契沖／墨書ハ蘆菴翁全部為正本矣／于時寛政庚申畢功井上斫水誌／七十八／右正本のうつつし松平高蔭のもたるをかりえて此印本に／あはせてこれを訂しかたはら己か愚考をも書誌

置ものなり／于時明治四年辛未仲春甲子日 大島為龍誌／七十
八齡」と校合識語あり。朱墨で校字・歌の出典等を記し、「為
竈云」「宣長云」「真淵云」「芦云」「契沖云」等の按語が書入れ
られている。不審紙・押紙あり。

契沖前出。蘆菴、たたこと歌の説で知らる。享和元年没、享
年七十九。ハ〇九―一b―二―三―七

春曙抄二二卷清少納言枕草紙装束撮要抄一卷 北村季吟

(装) 壺井義知 延宝二年七月跋刊 寛政六年七月印

(装) 享保一四年四月跋刊 寛政一年一〇月印 (後

合印)(江戸 青藜閣須原屋伊八) 大一三冊 移写清

水浜臣校合書入本

浅葱色表紙(二六・六×一九・三糎) 単辺題簽「枕草子春曙
抄一(一十二終)」と刻す。題下巻数の左に「校本」と朱書。見返
に各冊共各段文頭を記して目録とす。巻頭「春曙抄一」と題す。
発端等五丁ありて本文に接続する。単辺(本文首丁二一・九×
一七・六糎) 無界一二行、上部に解。傍注あり。版心白口、上
下象鼻は八型に区切らる。中縫「春曙幾(本文第一丁のみ「春
曙抄」とあり)」、下象鼻に丁附。尾題「春曙抄二(一十一)
終」巻一・十二にはなし。延宝二年甲寅七月十七日 北村季吟

書「跋」。「青藜閣発兌目録 江戸東叡山 池之端仲町 須原屋伊八版」四丁あつ

て、単辺奥附「(上下二段六点の広告書目)／寛政六甲寅年七月
購版／江都書林／東叡山池之端仲町 須原屋伊八／同町 高橋
与惣治」。春曙抄末冊裏表紙後補。全卷丁数本文、卷一―二六、

卷二―二八、卷三―三一、卷四―三二、卷五―二八、卷六―二
四、卷七―二八、卷八―二六、卷九―三〇、卷一〇―二八、卷
一一―二六、卷一二―二四。「風間城大／宮司文庫」「永田／蔵
書」の朱印を鈐し、第四冊以下陰刻「相川／之印」を鈐するも
抹消さる。

発兌目録匡郭外に「清少納言枕冊子十二冊並装束抄一冊安政
五年戊午十二月以／桜園先生所蔵泊酒舎清水翁校合本書寫了

杉室延(花押)」の校合識語あり。「学云」「浜臣曰」「浜按」「直
寅云」「谷川士清云」「契沖云」「本居氏説に」等の朱墨按語が書
入れられている。押紙あり。

本版は新典社刊行の「北村季吟古注釈集成」中に初印本が影
印されている。枕草子の注釈書は本書より僅に早く延宝二年五
月に京の田中権兵衛から、加藤磐斎の「清少納言枕草子抄」一
五巻が刊行せられた。

「装束抄」は浅葱色表紙(二六・六×一九・四糎) 単辺題簽

「枕草子装束抄」と刻し、題下に「校本」と朱書。「清少納言枕草紙装束撮要抄目録」一丁。内題「清少納言枕草紙装束撮要抄」。単辺(二二・一×一七・〇五糎)無界二三行。解文は「義按」として一格下げて刻す。上部に注記。版心白口、中縫に「装束抄」、下象鼻に丁附。尾題「清少納言枕草紙装束撮要抄終」。享保己酉歲初夏 門人多田義俊書「跋」一丁あり。「寛政元己戌年初冬」の刊記第一七丁裏にあるも、匡郭切れ、入木ならむ。本文一七丁。

末に朱の校合識語あり。「寛政十二年孟春始同年七月校終／文化元年仲春再校註辭案了同年／四月発会東海林氏於敝廬同年十月卒業以万歳抄対校了／文化十四年七月廿二日発会同十五年／四月廿二日卒業」と。「万歳抄」は前述の「罄斎抄」を指す。

本版は「春曙抄」延宝版と体裁・版式をほぼ等しくし、兩者揃いで所蔵する所が多い。単行の他、恐く春曙抄の附録として合印せられたものであろう。

清水浜臣前出。ハ〇九一―一―二三―一―二三

一切経音義二六卷 唐积玄庇 「江戸前期」刊(积鉄眼)

大八冊 覆明万曆刊本 狩谷校斎等校合書入本

香色表紙(二七・一×一九・三糎) 双边青色地題簽「支那撰述」

一切経音義^{卷一} 上郡^(卷四之七) 中郡^(卷八之十) 下郡^(卷十一之十三) 上秦^(卷十四之十六) 中秦^(卷十七之二十) 下秦^(卷廿一之廿三) 上并^(卷廿四之二十六終) 中并^(卷廿七)と刻す。但し「支那撰述」は〇で囲み、千字文番号は□で囲み更に〇で囲まれている。「卷八」に朱点をうち、「七」と朱書し、以下各

卷を一卷宛若い卷数に改めている。表紙右下端に「共八冊」の墨書あり。扉絵一丁、裏丁蓮牌中に「皇図鞏固 帝道遐昌／仏日増輝 濃輪常転」と刻さる。終 南 太 一 山 积 氏

「大唐衆経音義序」に追込みで第二丁表第六行「一切経音義卷第一^{大乘経}／唐 大 慈 恩 寺 翻 経 沙 門 玄 庇 撰」と題す。内題卷二六まで同じけれど、卷二八以下は題下

下端に「秦八」の千字文番号を刻す。但し卷二四・二六にはなし。双边(二二・三×一三・九糎)無界、第三丁より有界一〇行二〇字小字双行。版心白口、単辺枠内に「支那撰述(又は「経」)」「一切経音義卷幾 丁附」「郡一(一十)」「秦一(一十)」「并一(一六)」と刻す。尾題「一切経音義卷第一終」「一切経音義卷第三(五・七―九・十三・十五―二十五)」「卷第十」「一切経音義

卷十(十一の誤刻か。しかし、実際は本版卷次の誤りにて十でよきならむ)」。全卷丁数、卷一通三一、卷一―三〇、卷三一

二二、卷四一二〇、卷五一二三、卷六一二二、卷七一二四、卷八一二九、卷九一二五、卷一〇一二四、卷一一一七、卷一二二七（十一・十五・十四・十三・十二・十六と誤綴さる）、卷二三一三〇、卷二四一三一（卷末大墨格あり）、卷一五一三〇、卷一六一二八、卷一七一二三（卷末尾題後大墨格）、卷一八一二五、卷一九一二六、卷二〇一二〇、卷二一一二八、卷二二一二一、卷三三三四（尾題後大墨格）、卷二四一二八、卷二五一二一、卷二六一一八。尾題後の墨格は唐本によく見られるもので、恐らく底本にあったものをそのままに覆刻したのであろう。各冊頭に「熊蓼本」各冊末に双辺「慧林」の焼印を捺す。「弘前医官洪／江氏蔵書記」「森／氏」の朱印を鈐す。洪江抽齋・森約之旧蔵。

鉄眼黄壁版一切経の一。鉄眼一切経は隠元の将来した明万暦版の冊子本を底本として覆刻し、十年餘の歳月を要して延宝六年に功成った。現に宇治の万福寺に版木が存し、近年版木を漂って摺刷が企みられた。本版以前に幕府の力により、寛永寺で釈天海によって刊行された天海寛永寺版一切経がある。これも十年餘の日子を要し、活字版で印行され、慶安元年に功成っている。

本書書入は卷末匡郭外に「以清人莊斫錢坵孫星衍同校本与友人柴担人对校畢／欲比讎宋蔵本及慧琳所引本不知果此念否 狩谷望之」と手ずから識される如く、卷頭に「武進莊斫 嘉定錢坵 陽湖孫星衍同校正」と朱書し、朱句点をうち、眉上に同書との校字が記され、押紙に按語が書入られている。

裏表紙見返に「右玄応音韻捌箇余素蔵者与此本／一也但余感本每卷末有未刻黒処且紙／佳揚鮮此本雖劣有狩谷望之手校故今／売旧蔵本而新購得之云万延二年歳／次昭陽作諺方郷季四森養真約之書」の購得識語あり。卷末の未刻黒処とは先に述べた墨格のことである。第一冊見返には「清阮元四庫未収書目提要卷二曰一切経音義二十五卷」として提要の記載が引かれ、末に「元治元年甲子七月既望書森約之養真」の手識がある。

本項以下椽齋書入本が続く。椽齋は本稿(一)に既述。ハ〇九一
一b一二五―八

五経文字三卷 唐張参 文化七年刊(官版) 大三冊
覆清 狩谷椽齋校合書入本

朱色空押唐草文様表紙(二七・二八・一八・一) 単辺題簽
「五経文字 上(中・下)」と刻す。上には題下に「椽齋手校本」と書さる。大暦十一年六月七日司業張参序「五経文字序例」(隸

書) 一一丁表迄。卷上一一丁裏より本文に入る。内題「五經文字卷上(中・下)」。内題中下は隸書体。内題次行目録から本文に接続する。单边(二二・五×表裏通二九・七纏)無界五行小字双行。版心なく裏丁匡郭外に「五經文字上(中・下)丁附」。第一丁は「五經文字上例」とあり。尾題「五經文字卷中(下)」。

卷上は尾題なく、裏表紙見返に「石本空一行」と朱書し、紙片を貼り其上に「五經文字卷上」と石本による校字が為されている。卷末に「乾符三年孫毛詩博士自/牧以家本重校勘定七月/十八日書/刻字人魚宗会/文化七年刊」と刻す。上四六、中五八(但し廿四中下・廿五上中あり、実数は⊕四丁)、下五四丁目録別丁三丁。「森/氏」朱印を鈐す。森积園旧蔵。

見返に「五經文字九經字様共十石金石萃編」と書し引用、末に「望之按九經字様補刻者王元吉馬攀龍也其尚書毛詩儀礼末有王堯典之名見娥術篇…」と墨書す。押紙あり。朱墨藍緑の四筆が見られ、多く緑筆にて眉上に「今按」等の按語を記し、朱藍にて石本と校合、文字の微かな線画迄朱筆で細かく修正が施されている。

本書は後出「新加九經字様」と共に、偏旁によって分類した字体字書で、後唐の開成石經にも附刻せられた。本版また揚州

の馬氏叢書樓刊本を「九經字様」共々覆刻せしもので、我国では始めての印行にかかる。後天保になって松崎慊堂は石經の拓本により縮臨し、李唐の風を留める諸書で校勘した「縮刻唐開成石經并五經文字九經字様」を審定校刊した。ハ〇九一―b―二六一三

好古小録二卷附録一卷・好古日録一卷 藤原貞幹 寛政七年九月刊(京 文錦堂林伊兵衛等) 大二冊 凶入
(日) 寛政九年四月刊(京 林伊兵衛等) 大二冊 凶入 狩谷掖齋書入本

浅葱色表紙(二六・六×一八・三纏) 双边題簽「好古小録 金石 書画 乾(雜考 坤)」。双边見返「無仏齋藤先生/好古小録/平安書舖(以下に「文錦堂/柳枝軒/盈進堂/瑤芳堂/竹苞樓」と

五肆を刻す)梓行」。寛政六年六月 正五位下橘経亮「好古小録序」一丁。「好古小録上(下) 目録」四丁、下二丁。本文卷頭「好古小録上(下)/貞幹」と題署す。内題下に「貞幹/藤原」と陰刻。单边(二二・五×一五・七五纏)一〇行小字双行、漢字片仮名交り。版心白口、中央下部に「上(下・附)丁附」。尾題「好古小録上(下)終」。「附録」として凶一六丁あり。单边奥附「寛政七年乙卯九月刊行/平安書舖/林伊兵衛/小川多左衛

門ノ西田莊兵衛ノ北村莊助ノ鶴鶴惣四郎」。本文上三六、下二一丁。「伊沢氏ノ酌源堂ノ図書記」「津山氏ノ所藏記」「青裳文庫」「幽香書ノ屋藏ノ書印」の四朱印押捺さる。伊沢蘭軒・狩谷椽齋等旧藏。

江戸後期に漸く勃興してきた広い意味での考古文化史学の先驅的著作で、多く実見の上で寸尺を測る等形態や素材に注意し、所藏者を示し、他と比べて真贋の鑑識を行い、図版を載せ、簡単ではあるが、現今の実証的な学問への道を開いた。椽齋の書入はそれを更に徹底深化させたものと云える。墨格の多い此書に全巻に亘って朱墨でかなりの訂正を施し、「文政四年六月廿ノ五日法隆寺西園ノ院ニシテ観ス（施法隆寺物勅書）」「寛政九年三月観（鴨毛屏風）」「文（寛を抹消して改む）政二年四月観（魚養書）」等親ら実見した日を記し等している。挿入紙あり。「国朝印板ノ書何ノ時ニ始ルヲシラズ法隆寺伝ル所ノ多羅ニアレドモ銅板トミユ……」の本文上層書入には、「法隆寺ニアル百万塔ノノ多羅尼何ヲ以テ銅ノ板ト鑿セルニヤ覚束ノナシ是宝龜元年ノノ物ニシテ唐ノ大曆五年ノニアタレリ」と、今に尾を曳く論争の発端が既に誌されている。「……又活板国字曆アリ天正巳前ノ者ト云……」の上層には、「活字文祿ヨリ始ルノ

天正以前ノモノニ非」と書入られている。粘葉についても言があり、「日録」共々書誌学に関係する書入も多い。朱書入を更に墨筆にて訂正している箇所（古紙の寸尺）もある。

「日録」は浅葱色表紙（二六・五×一八・五糎）双边題簽隸書体「好古日録 本（末）」。「寛政丙辰孟春下浣日 藤原資同識」。「好古日録序」一丁。序隸書体。「好古日録目録」四丁。本文巻頭「好古日録ノ左京 藤原貞幹 著」と題す。单边（二一・五×二五・七糎）無界一〇行小字双行、漢字片仮名交り。版心なく折山中央下部に「丁附」のみ刻さる。尾題「好古日録終」。单边奥附「集古図全三冊嗣出ノ寛政九年丁巳四月印行ノ京兆書肆ノ林伊兵衛ノ小川多左衛門ノ西田莊兵衛ノ北村莊助ノ鶴鶴惣四郎」。本文本三三、末通七〇丁。

「小録」の補遺篇とも云うべき考証隨筆で、書入また「小録」に同じい。「鵬齋云」「篁墩曰」「望之按」等の按語が見える。「古刻柳韓文（俗称 搨板）」の条の書入には、眉上に篁墩の説を引いた後で、「望之近日活字本正宗記ヲ獲兪良甫ノ題ニ次テ云寛永七年庚午九月吉日板行畢トアリ是兪良甫カ古板本ニヨツテノ活字セル時記ス所ナリ貞幹古板原本ヲ不見活字本ヲ以テ兪良甫所刻トス故ニ丁卯ヲモ寛永四年ナラント思ヘルナリ」と記す。貞幹は

掖齋等の京都訪古旅行の際の案内者の一人であり、自らも実見の人であったが、掖齋からすれば尚此の如くである。まことに実見の学とは云うは易く行方は難い。

本書入本は両書共、汲古書院刊行の「影印日本隨筆集成」五・六に収められ、同じく浜野氏が編者の一人であった「日本藝林叢書」第三卷に翻印されている。

本書は自筆の初稿本が静嘉堂文庫に、再稿本が大東急記念文庫に存する。ハ〇九―一b―二七―四

日本国見在書目録 統群書類従卷八八四 藤原佐世等奉

勅編 「嘉永」刊 大一冊 摸刻〔鎌倉〕写本 森枳

園移写狩谷掖齋校合書入本

香色布目表紙(二六・四×一八・七糎)単辺題簽「統群書類従 八百八十四」と刻さる。表紙中央やや右寄りに墨書「日本現在書目」。見返に「大日本史」等より引いた藤原佐世の伝が書入らる。扉の如く「統群書類従卷八百八十四／総検校保己一集／雜部卅四／日本現在書目録」と刻す。裏丁左下端に「八百八十四」と刻さる。扉に「簽題如此／外典書籍目録／(隔一行)／室生寺」と朱書あり。本文巻頭「日本国見在書目録／合冊家／正五位下行陸奥守兼上野権介藤原朝臣佐世／奉勅撰」

と題署す。無辺無界一〇行、目錄なれば印面高不等。版心なく「要 丁附」を刻す。尾題「本朝見在書目録其後渡來數卷」とあり、それらを載せ、末に「右現在書目一卷縮臨大和国室生寺所伝之／本入彫蓋亦七八百年前之物蝨蝕數字餘亦／多可疑者然一從原文不敢妄改從疑以伝疑／之義也」と刻す。下に「塙忠宝書」と朱で書入られている。卷末に嘉永辛亥臘月十日 飢肥安井衡「書現在書目後」一丁を置く。本文三九丁。「問津館」「森／氏」の朱印押捺。

卷末第四一丁裏の校合識語に「見在書目一冊、其原本為鳥子紙胡蝶裝、冊皮表面有室生寺三字、則為当寺旧藏可知也、此書文政年間狩谷掖齋遊西京之日、所百計而購得、實是天下無二之宝典、掖齋没後以善賈轉移、經朱門諸家之感、不出人間已三十年、余也自少從翁而説尔足説／文及本艸諸書、今此書終入我庫中、固非偶然、則子孫宜永保／感之耳、明治己巳春日枳園森立之書于西薇福山城東／医者坊之長聳松下寓居、統いて一格下げて「皇国所伝李唐之遺卷、亦為不尠矣、皆是見在書目中／所錄者也、其在于今日者、雖闕卷斷紙、於書名上直以朱筆為團／圈以表之、其在于彼而不伝于此者、以朱筆為円輪以別之、其無朱／記者皆為逸書也、立之又書」。下端に、実は最も早い

時期の識語であるが、「嘉永壬子五月三日塙氏所贈翌／四日一
読過源立之」、続いて裏表紙見返に更に一格を低して「掖斎嘗
令人精摸見在書目、因自就／隨唐二志校之、隋用藍筆、唐用朱
筆、隋唐二志不載者、上頭施円圈子以為／之別、今一々於此書
字傍写之、余亦比校二志、／以補其遺編云、甲申夏日七十八翁
森浴仙」。書人の事情がよく知られる。「立之案」「約之案」「掖
翁云」等の案語が加えられ、「隋志左右額印之、唐志同、隋
唐志所載者同、●日本伝本正頭、○西土伝本同」という標識が各
書に附されている。

本書は宮中の秘閣冷然院焼失後、勅命により編纂された我国
最古の当時現存漢籍の目録である。

本版は枳園識語に云う如く、掖斎が購得し学界注目的とな
った室生寺旧蔵の古写本を摸刻したもので、その原本は明治二
年枳園が入手したが曲折を経、今宮内庁書陵部に蔵されている。
古典保存会の影印本がある。又浴仙識語に云う掖斎の令摸写書
入本は静嘉堂文庫に現存している。なお汲古書院の「日本書目
大成」一には、土佐佐川青山文庫蔵本の重鈔本が影印せられて
いる。

掖斎はこの書入をもとに整齐考証し、「日本現在書目証注稿」

を編修せんとしたが未完に終った。安田文庫蔵の草稿本は大正
の震災で不幸焼失したが、重鈔本をもとに山田孝雄氏の解説を
附し「日本古典全集」に翻印せられている。ハ〇九一―b―二
八一―

職原鈔二卷 群書類従卷七一 北畠親房 「江戸後期」

刊 「修」 大一冊 慶応二年森約之移写狩谷掖斎校

合書入本

香色布目表紙(二六・四×一七・九五糎) 単辺題簽「羣書類

従七十一」と刻さる。表紙中央に「職原抄 上下／類従後改

刪正本是也(此行約之筆)」と書さる。巻頭「群書類従卷第七

十一／檢校保己二集／官職部二／職原鈔上(下) 北畠准后親

房卿(下は題名のみ)」と題署す。無辺無界一〇行二〇字小字

双行。印面高約一九・六糎。訓点・送仮名附刻。上層に校字標

注刻さる。尾題「職原鈔下卷」。上下末に以下の底本奥書を刻

す。上「正平二季十月廿五日書写畢同二十六日写点／訖權左中

弁兼左近衛權少将源顯統／寛正五季甲五月二十三日以權大外記

之本書／写」。下後記の末に「正平二年十二月一日書写之並写

点畢／權左中弁兼左近衛少将源顯統」。尾題後に以下の校語を

刻す。「右職原抄上下二卷僕所蔵古写与流布本稍／異頃者比校

白川少將秘本及屋代弘賢藏元／龜三年鈔本不無少異而大体符合
則知流布／書殆涉後人加筆也僕本蓋存真面目乃傍以／活板訂正
以為定本」。上二八、下通五三丁。「森／氏」「根津文庫」の朱
印を鈐す。根津の二字は刻印の上に墨書さる。根陰刻、津陽刻。

有職故実、それも特に官制に託した親房の政書で、慶長勅版
以来諸版がある。周礼を典拠とすることが多い。約之の校合識
語に「慶応丙寅四月九日臨摹狩谷望之朱校了望之手校本今歸鈴
／木舎人感云森約之目礼父養真齋（以上朱書）同五月十日臨写
望之青校了而業始成終朱青合校与原本全同其様云今日夏至
約之（以上藍書）」とある如く、朱藍両筆にて全巻に亘り校合書
入が為されている。上末底本奥書を校合した後には「于時文明
十四年^{壬寅}孟秋之比雇藤原村綱法師令／草書者也 北司員外郎丹
治宿祢判有（以上朱書）／文禄参年孟陬式日年号書之（藍書）」。
同じく下末には「于時永正十八年^{巳辛}七月吉日書写之（朱書）／
文禄参年孟陬二萱年号書之（藍書）」と書入られている。

また初印本を入木によって改めた修刻箇所を指摘し、「森約
之案」等としてその是なるを考証している。例えば第一二丁表
第四行眉上に「森約之案初刻注文／正字下有従字後改／删除正
之文明十四年／古抄本文禄三年古／抄本等皆無従字／是也」と

あり、本文は「大一人^{相当正六位上近代五位}」すなわち「正」
の字が入木によって補修され、印面が浮いた感じが強く出てい
る。他にも入木により、かなり誤読誤刻箇所が修正されている。
群書類従板本にはこうした修改が往々なされており、使用時に
は注意を要する。ハ〇九―一b―二九―一

白氏文集林家跋文（外題） 狩谷掖齋編 天保八年四月写
（渋江抽齋） 大一冊

香色蠟引表紙（二六・八×一八・六糎）左肩に直に「白氏文
集林家跋文」と書す。枳園の筆ならむ。扉に「林本白氏文集
跋」と題し、題下に「弘前医官渋／江氏蔵書記」「森氏開万／冊
府之記」の二朱印を鈐する抽齋手写元題簽を貼附。以下に、掖
齋の臨摹せる羅山・春齋父子の那波古活字本に書入られた金沢
文庫本との校合識語十一丁と、延宝元年十月九日弘文院学士林
叟跋の跋文二丁とを、抽齋が又臨摹したものを綴ず。巻末に
「天保八年四月廿七日手抄早 抽齋」と署さる。巻頭に「森／
氏」の印、巻末に「問津館」また抽齋自署の上に「学依周鼎／
不述其解／医宗三養／必酌其原」（陰刻）「柳□□抽齋／渋江氏
平姓／全善道純」（陽刻）の二印を鈐する。

見返に「金沢本校正篇目」を貼附す。末に「羅山先生所校有

依金沢本者有依宋槧本者第六十六卷詩題中樞字校語云犯御名今雖／不能悉識別而春

齋先生跋文所謂旧点四十卷者略可考知因举卷数／之目如右其載金沢本跋者以朱圈標之／金沢旧卷今存廿八世三兩卷又存影写本三四兩卷」と。すなわちこれは林家校合書入本の跋文から抽齋

の按じた当時所在の金沢文庫本白氏文集の卷次一覽である。此貼附された紙片の後に「以下十三葉影抄林家跋文者為掖翁之旧感／渋江籙齋就此跋文有所攷縷々書之前文是也今／粧釘新成併以籙齋所書糊于此以存旧云／乙酉秋日 非常道人森立之」の書入あり、本書は枳園の手によりかかる装訂がなされたことが判る。

春齋の跋に「……先考元和戊午之年加朱於那波氏刊本全部、而求得旧本写点者四十卷、定知菅江流传之餘也、其三十一卷未遑補点、……自壬子之春以副本一部畀侍生田植、暇日口授加點、而復写諸家本、至癸丑之冬畢三十一卷、於是合部七十一卷旁訓悉備、……」とある。すなわち本書の源となつたのは那波道円校刊の古活字版に金沢文庫本の旧鈔本四十卷で羅山が校合写点し、未成の三十一卷をほほ半百歳の後、暇日を得た三男春齋が遺志を継いで漸く補点完成させたものである。古活字版の双辺匡郭をも數写しにし卷末識語部分が臨摹されている。摹写面匡

郭部分外法約二一・二纏。林叟跋文字面高約二二・〇纏。尚この羅山校合加點本は現在東京国立博物館に蔵されるが、現所在未詳の金沢文庫本の卷次も含まれ、白詩研究上貴重な資料となっている。

羅山、薙髮後道春と名告る。明曆三年没、享年七十五、初代大学頭。二代大学頭鷲峰、剃髮後春齋と名告る。延宝八年没、享年六十二。ハ〇九一―一b―三〇―一

新加九經字様 唐玄度〔江戸後期〕刊〔官版〕 大一冊

文政二年二月小島成齋校合書入本

焦茶色表紙（二六・五×一八・〇纏）単辺題簽官板九經字様

全。覆定石經字体官朝議郎權知沔王友翰林待 詔上柱国賜緋魚袋臣唐玄度撰「新加九經字様序」四丁、末に「当開成丁巳歲序謹上」とあり。次に「新加九經字様考卷」と題し開成二年八月十二日牒四丁。内題「新加九經字様」。単辺（二二・九五×表裏通三〇・六五纏）無界五行小字双行。版心なく、裏丁書腦中央下部に「九經字様 丁附」と刻さる。尾題「新加九經字様終」。乾隆五年歲在上章浚灘辜月長至後二日祁門馬日璐識〔跋〕二丁。本文二九丁。「人中／分陀／利華」朱印を鈐す。伊佐岑満旧蔵。

前掲「五經文字」の姉妹篇とも云うべきもの。本版には刊年

の記載を欠くが、恐く同時期の刊行であろう。同項参照。「五経文字」と共に雄山閣の「異体字研究資料集成」別巻一に影印さる。

本書入は、末に「文政己丑二月望以石本校勘畢源知足石本湯田狩谷氏所藏也」と朱書する如く、後に松崎慊堂の羽沢石経山房に於て

「縮刻唐開成石経并五経文字九経字様」の校勘作業に加わった小島成斎のもので、朱墨藍にて校合し、眉上に按語を加え、刻字の微かな線点に至る迄訂正が為されている。朱点・朱引あり。本書の書入も、前出「干禄字書」の書入と体式相似している。

小島成斎前出。成斎には「馬本五経文字九経字様校訛」の著がある。ハ〇九一―b―三一一

続日本後紀二〇巻 藤原良房等奉勅編 立野春節校 寛文八年一〇月跋刊(京 林和泉掾) 大二〇冊 移写

狩谷掖齋校合書入本 岸本由豆流旧蔵

紺色表紙(二七・五×一九・三糎) 双边題簽「続日本後紀一(一二十終)」。表紙右肩「卷一／仁明天皇(卷二よりなし)／起

天長十年二月／尽同年五月」等と目錄外題を朱書す。貞観十一年八月十四日 太政大臣從一位臣藤原朝臣良房 参議正四位下式部大輔春澄朝臣善繩「続日本後紀序」三丁を冠す。本文巻頭

「続日本後紀卷第一(一二十) 起天長十年二月尽五月／太政大臣從一位臣(臣字卷三・四・十・十六・十九なし) 藤原朝(朝字卷十五なし) 臣良房等奉 勅撰」と題署す。双边(二一・三×一四・三五糎) 無界八行一七字小字双行。訓点・送仮名・音訓合符附刻。版心粗黒口双黒魚尾。中縫に「続日本後紀幾(第五・六・十一―十四) 丁附」。尾題「続日本後紀卷第一(一二十)」。

但し卷五のみは「続日本後紀五終」と刻す。寛文八戊申孟冬穀旦 立野春節識(跋) 一丁、題署に続いて「洛陽小川 林和泉掾版」の刊記あり。各卷丁数、卷一―通二七、卷二―二二、卷三―二六、卷四―二二、卷五―三三、卷六―一八、卷七―一九、卷八―三一、卷九―三九、卷一〇―二八、卷一一―一五、卷一二―三二、卷一三―三三、卷一四―一六、卷一五―一六、卷一六―二六、卷一七―一八、卷一八―三一、卷一九―三三、卷二〇―一五。「岸本家蔵書」「朝田家蔵書」の二朱印が鈐さる。

欠格の条文がままあり、一例を挙げれば卷七第一丁裏に十一字、第二丁表に四字程、文字が刻されていない。

各冊の朱筆校合識語を記せば、卷二末「文政七年閏月五日以亡友細井氏遺本校之 望之／文政十年閏月十一日以大橋正樹蔵本校 望之」、卷三末「文政甲申閏五月以細井蔵本校望之」、卷

四末「文政甲申年閏八月五日以細井貞雄遺本校之 望之」、卷五裏表紙見返「文政甲申年閏八月六日以昌阿遺本校 望之」、卷六末「文政甲申年閏月六日以細井昌阿遺本校 望之」、卷七末「甲申閏月六日以細井本校 望之」、卷八末「甲申閏月七日以昌阿遺本校讐」、卷九末「甲申十月十二日以細井昌阿遺本校」、卷一〇末「以細井氏藏本校讐甲申十月十二日 望之」、卷一一末「甲申十月十二日以細井氏藏本校 望之」、卷一二末「甲申十月十三日以細井本校是卷 望之」、卷一三末「甲申十月十三日以昌阿本校 望之」、卷一四末「甲申十月十三日以細井本校是卷 望之」、卷一五末「甲申十月十三日以昌阿遺本校 望之」、卷一六末・一七末「甲申十月十四日以細井本校 望之」、卷一八末「甲申十月望以細井本校 望之」、卷一九末「甲申十月望以細井本校此卷 望之」、卷二〇裏表紙見返「狩谷氏校合本奥書云^{以朱書之}全部校読了／寛政六年八月十九日 高橋真末／与吉田雨岡清水浜臣大島林益会読校合了／寛政八年八月八日 真末／安田躬弦本 井上作左衛門本／以細井昌阿藏本校正了 校語記云山本者是也^{此一行以紫書之}／文政五年七月廿九日以類聚国史校讐畢前田夏蔭対校／ 望之志／文政甲申十月十五日以細井昌阿所遺古鈔本対校／ 望之。朱墨で校合・解注の書入が為

され、藍も交えて「真末按」「高潔云」「勝臯案」「弘賢按」「義亮按」「保己二云」「久老云」「魚彦按(卷二以下)」等の按語が書入られている。恐く卷一以前と以後とは書入移写者を異にするかと思われる。押紙あり。

校合識語に見る如く、若き日の掖斎高橋真末が寛政六・八年に校読・会読し、約三十年後の文政五・七年に類聚国史や細井貞雄藏本と対校、一部には文政十年の大橋正樹藏本との校合も存する。江戸の学者の書入はこのように長年に及ぶものが多く、一々の書入時期が即断できぬ場合も屢々起る。

本書は「日本後記」の後を受けた仁明天皇一代の正史で、六国史の一。本版により始めて印行された。本版は後天明八年春焼板となり、僅に残った板木と覆刻により新彫した板木とを合せ、寛政七年春京の出雲寺林元章より修印されている。ハ〇九十一b―三二―二〇

正平本論語札記 市野〔迷庵〕(光彦) 写 大一冊 仮綴 大正七年一〇月浜野知三郎移写迷庵重訂本

香色渋引表紙(二七・二×一九・九糎)左肩直に「論語札記」と書す。表紙右肩に「三」と書さる。内題「正平本論語札記」。前書の末に「文化十年癸酉冬十月江戸市野光彦識」とあり。無

辺無界一〇行二二字小字双行。朱句点を附す。字面高約二〇・五糎。尾題なく末に「光彦重訂」と朱書。卷末押紙に「三村本」(以下朱書)十七年一月五日閱了。献／大正七年十月五日以三村本校了知」の校合識語あり。全二〇丁。

本書は現存する本邦経書刻本の嚆矢たる正平版の論語を文化年間に覆刻し、其折合せ附した迷庵の解題校勘記で、初印本に迷庵の手訂が加えられたものが、山中信天翁から竹清三村清三郎の蔵に帰した。それを浜野氏が借りて移写したものである。三村氏蔵の原本は大正十一年に単跋本と共に斯文会より安井小太郎氏の解題を附して影印されている。尚札記の自筆稿本が東洋文庫に存する。

迷庵当時は未だ諸版を一堂に会して広く比較検討する機を得ず、所謂単跋本を初刻と見、それが覆刻をなした。本札記にはこの重訂によった常盤御文庫の修刻本があるが、修訂は一部にとどまり、本重訂の全てには及んでいない。

本写本は刊本と行格を等しくし、朱で誤字誤刻を改めたもので、一部は直接誤字の上に書改められている。尚刊本の句点はあるが、本写本では朱の、が附されている。

市野迷庵、本稿(一)に既出。ハ〇九―一b―三四―一

善身堂一家言二卷 亀田鵬斎撰 川村富穀録 文政六年
一二月刊(江戸 慶元堂和泉屋莊次郎) 大二冊 猪飼
敬所書入本

縹色空押雲型文様表紙(二六・四×一八・一糎) 双边題簽
「善身堂一家言 坤(上冊破損「乾」とありしか)」。黄地单边
見返「文政六年癸未新鑄(横刻)／鵬斎先生著／善身堂一家言／
東都書肆 慶元堂藏板」。本文卷頭「善身堂一家言卷之一(二)
／(隔一行)／鵬斎先生著 受業弟子 川村富穀謹次」と題署す。
双边(一九・五×一三・〇糎) 有界九行二〇字小字双行。訓点
・送仮名・音訓合符・句点附刻。版心白口単黒魚尾、上象鼻に
「善身堂一家言」、中縫に「卷幾」、下象鼻に丁附(但し第五丁
より中縫「卷幾 丁附」。尾題「善身堂一家言卷一(二)」。文
政癸未冬十一月 江戸 川村富穀謹識〔跋〕一二丁。单边奥附／
田鵬斎先生著述目錄(上段三点下段四点)／文政六年癸未十二月
新鑄／東都書林 浅草新寺町 和泉屋莊次郎」。本文丁数卷一
一五八、卷二一五三。
上層に「猪飼敬所先生評」と書す。以下本文の一つ書を「一
字皆宜刪」とし、文章を改め、圈点・傍線を引き、読後の評を
朱書で標記している。「此解亦恐不免／此嘲」「鵬斎深於仏／学

而淺於儒／学」「明季王学之徒／往々如此、今日／西土不聞有
如／此者、况我邦乎、／近世和漢講古／学其弊在徒求／考執事
虚文而不用心於修己治人之実学、」等の評記あり。「経云。自然
妙合。」の箇所には朱で傍線を引き、眉上に「聖經未見此語：
…」とある。「仁者人也者、言／仁者出於人情／也、鄭注非
是、」等ともある。附箋一枚あるも敬所の手に非ず。

本版は、井上金峨門折衷学の著者が論語各章を摘解し、後に
経説二条・性説・仁説を加えたもの。

著者亀田鵬齋、文政九年没、享年七十五。また詩・書で知ら
る。猪飼敬所前出。ハ〇九一―b―三五―二

荀子遺秉二卷 桃白鹿(源蔵) 寛政一二年一月刊(京)

水玉堂葛西市郎兵衛) 大二冊 猪飼敬所書入本

砥粉色表紙(二六・五×一八・〇糎) 双辺題簽「荀子遺秉

上(下)」。双辺見返「白鹿桃先生著／荀子遺秉／平安 書肆 水

玉堂梓」。魁星像と「水玉／堂／印記」押捺さる。寛政十年戊

午春三月 雲藩 桃源蔵序「荀子遺秉序」三丁、末に「桃源蔵

曰：」とある「史記孟子荀卿列伝」通一二丁を冠せ、本文巻頭

「荀子遺秉卷上(下)／雲藩 桃源蔵子深 著(下には「日本

雲藩へ以下同じ)」とあり」と題署す。左右双辺(二〇・

四×二四・六糎)有界九行二〇字小字双行。訓点・送仮名・音

訓合符附刻。版心白口単黒魚尾、上象鼻に「荀子遺秉」、中縫に

「卷之上(下)小題」、下象鼻に丁附。尾題「荀子遺秉卷上(下)

終」。単辺奥附「寛政十二年庚申春正月穀旦／皇都 書肆 京極

通五条上ル町 葛西市郎兵衛」。此書肆は荀子を多く刊行して

いる。本文上二二、下三二丁。「中島／幹事／図書」「猪飼／敬

所翁／遺書」の二朱印を鈐す。

荀子の簡単な摘録摘解書で、書入は二手あり、一は「彦博按」

とある敬所の墨筆按語と朱句点で、標記は第一丁表裏や巻二に

一ヶ所ほどでごく少い。一手は朱校字で「此ノヨゴレ除クベシ」

「(玉)コノテン除クベシ」「此ノ通ニ改ムベシ末ガ／一字アク

割合ニ／ナル」等とあれば、恐く近代のもので、或いは本書を

翻印底本にせむとしたものでもあろうか。

桃白鹿、享和元年没、享年八十。先年亡くなられた元東京大

学史料編纂所長桃裕行氏の先で、桃家歴代の稿本や蔵書が桃家

に残されている。ハ〇九一―b―三六―二

九経談一〇巻 大田「錦城」(元貞)「文化一年」刊

〔後印〕(大阪 宋栄堂秋田屋太右衛門) 大四冊 小

畑詩山訂正並移写猪飼敬所書入本

朱色空押花菱文様表紙(二五・一×一七・八糎) 双辺題簽

「九經談 元(亨・利・貞)」。題下に、元「総論 孝經」亨「中庸」

利「孟子」貞「詩 春秋」と小題が書さる。元「大阪書林大阪心

齋橋通安堂寺町秋田屋太右衛門板」、亨「浪華書林 宋榮堂藏版」、

利「浪華 宋榮堂主人識」、貞「大阪書肆 秋田屋太右衛門

藏板」と刻する広告書目を各冊見返に貼附。卷頭「九經談卷之

一(一十)／加賀大田元貞公幹著(卷七―十は「加賀大田元貞才

佐著)／陸奥門人(跨行)／奥山 清興／亀卦川守一／全校(跨

行)と題署す。校者姓名は各巻異なる。単辺(一八・〇×一二・

八糎)有界一行二〇字小字双行。訓点・送仮名・音訓合符附

刻。尾題「九經談卷之一(一十)」。各冊裏表紙見返に広告書目

を貼附す。利冊は貞冊見返と同じ。貞冊は「大阪心齋橋通安

堂寺町 秋田屋太右エ門板」と刻する広告書目。第一冊卷一―

一九・卷二―二三・卷三―二六、第二冊卷四―二六・卷五―二

四、第三冊卷六―二七・卷七―一四、第四冊卷八―一五・卷九

―一八・卷一〇―一〇丁。卷二・一〇を除き校者姓名の次行に

「詩山小畑行簡訂正」と朱書して訂正と朱墨書入が為さる。書

名を記せし札に「狩野氏図書記」の朱印を鈐す。狩野亨吉旧蔵。

天地裁断されしか。

本書は孝經・大学・中庸・論語・孟子・尚書・詩・春秋左氏

・周易の九經に各一卷を充て、初に総論凡四十二条をおいた

わば九經概論とも去うべき解説書でよく読まれた。始め多稼軒

の藏板として出刊され、後書肆の手に渡り様々な奥附が附され

明治迄陸続と印行が為されている。「文政七甲申年二月補刻」や

「天保十三壬寅歲初春補刻」の奥附を持つ書もあるが妄補か。

本書入は卷頭書腦に「戊辰季夏、小倉石川彦嶽、齋示此書、

且請評論、余熟讀一過、乃擊節曰、識見正大、援引宏博、竊謂

海内莫二、不意今／日有斯人、稱嘆之餘、標記鄙見、以還之、

間有辨駁者、則愚者之一得、亦是君子同而異之意也、近江豬飼

彦博文卿、／手録於平安新町尚志齋、」とある如く、敬所の上

層標記を移写し、本文には詩山の訂正と朱墨の書入が為されて

いる。敬所の標記に「余二十四歳、始読書經大全、略知古文之

可疑、自後読群籍、乃知其偽益明、但前後漢書儒林伝、所謂古

文者、果是何書、不能积然於胸中久之、五年前得王鳴盛後辨、乃

積年滯義、霍然氷积、今説此書、大服其精義云、」余常疑左伝所

記之事、……余亦欲補正左伝注疏諸家之疎失、稍々属稿、意亦

暗合、等とある。敬所には左伝の標記本や考証等が存する。尚

本書の敬所批校本は「日本儒林叢書」第六卷に翻印せられている。

著者大田錦城、加賀藩儒。山本北山門下の折衷学派で、経学を以て聞えた。

小畑詩山、明治八年没、享年八十二。儒医にして、詩家として知らる。詩は亀田鵬齋、儒は北山門の朝川善庵に学ぶ。ハ〇九一―b―三七―四

合刻四書四卷〔片〕山兼山(世璠)編点 明和八年一月刊〔修〕(江戸 鴈金屋義助) 大一冊 古賀穀堂等書入本

縹色表紙(二六・五×一七・五糎) 双边題簽「四書」孝経字記 大学中庸 全」とあり、上部破損。恐く「刻」と有しならむ。明和八年辛卯

十一月 兼山 山世璠撰 東都 河保寿書「合刻四書叙」二丁を冠す。本文卷頭「合刻四書辛(壬・癸・甲)之卷」孝経(学記・大学・中庸) 上毛 山世璠国読」と題署す。左右双边(一九・八×一五・五五糎) 有界九行一六字。訓点・送仮名・

音訓合符・句点・声点附刻。まま眉上に校合標注が刻されている。版心白口单黒魚尾、上象鼻に小題、下象鼻に丁附を刻す。尾題なく、中庸末に「兼山先生 梓書目素読本」(六行の広告書目あり)明和万年之八年辛卯十一月/東都書戸小石川伝通院前鴈金屋義助桐梓」の刊記あり。孝経末に孝経を多く刊行せし「江

戸書肆 小林新兵衛梓」の刊記が刻さる。合版か或いは求板本か。本文丁数、辛八、壬六、癸八、甲一五。「白崔堂/函書信」の古賀穀堂朱印を鈐す。

本版は兼山が未だ宇佐美姓であり、序や卷頭の題署に「宇世璠」とあるのが初刻で、本書はその修印本である。しかし私の実見している限りでは、修のないものも、孝経末と中庸末の刊記は本書と等しい。此初刻と思われる版には「兼山字子訓点/古合刻四書孝経 大学 中庸 学記/青山堂桐梓」と刻する見返が附されており、青山堂鴈金屋義助の手になるものと見てよからう。本版にはまた後印と見られる「嵩山房蔵板目錄」を附した印本もあり、

明治迄引続いて印行されている。なお詳しくは拙稿「孝経目錄補遺並江戸時代孝経刊行年表」(本論集第二十一輯)等参照。本書は序に「余今権借新安氏書題以孝経字記大学中庸為吾家四書以備蒙養」とある如く、孝経以下の単経本で、朱墨筆で校合・解注・典拠引用等の書入が周密である。書入は何手かあり、恐く古賀穀堂等古賀家の人々の手になるものであろう。押紙不審紙あり。眉上に書入られた按語には「善韶按」「皆川云」等の記載も見え、中庸末版心部の表には「文化元年秋八月皆川正本写」の記載もある。

兼山は一時宇佐美瀧水の養子となり宇佐美姓を用いたが、後本姓の片山に復した。復古学より出て後には折衷的な傾向を示した。天明二年没、享年五十三。朝川善庵はその子である。古賀穀堂は本稿(一)に既述。ハ〇九―一b―三八―一

倭名類聚鈔二〇卷 源順撰 那波道円校 「寛文一一年

一〇月」刊 「後印」(大坂 渋川清右衛門) 大五冊

江藤正澄移写伴信友等校合書入本

香色刷毛目格子文様表紙(二七・三×一九・四纏) 単辺題簽

「和名類聚抄 一(一五)」と刻す。但し卷三―倭、卷四―味。

題下に「校本」、卷三「校合本」と朱書。第二冊右肩に「職官部／

国郡部自山城到長門」と目録外題朱書。「倭名類聚鈔序」三丁、元

和三年丁巳冬十一月 日 羅浮散人洗筆於雲母谿清処「題倭名

鈔」二丁、番陽那波道円識「新刻倭名類聚鈔凡例」一丁、「倭

名類聚鈔惣目録」四丁を冠す。内題「倭名類聚鈔卷一(一二十)

(卷第六)」、卷三のみ題下に「源順撰」と刻さる。単辺(二三・

三×一七・五纏) 無界一三行二小字双行。訓点・送仮名・

音訓合符附刻。版心粗黒口双黒魚尾、中縫に「和名卷之幾 丁

附」。尾題「倭名類聚鈔(卷一八鈔なし) 卷第一(一二十)終

(卷九終)」。刊記「書林 大坂心齋橋筋順慶町 渋川清右衛門」。

第一冊卷一―本文九丁、卷一―通二〇、卷三―一五、卷四―通二三丁。第二冊卷五―一四、卷六―通二七、卷七―九、卷八―通一八丁。第三冊卷九―九、卷一〇―通一八、卷一一―九、卷一二―通二三丁。第四冊卷二―三九、卷二四―通二〇、卷一五―一八、卷一六―通一九丁。第五冊卷一七―一二、卷一八―通二三、卷一九―一四、卷二〇―通三一丁。「江藤文庫」朱印を鈐する。本書は平安中期の類書的な漢和辞典で、一〇卷本と二〇卷本の二系統があるが、近世に通行したのは二〇卷本の系統であった。本書の分類意識は後続の我国の書に大きな影響を与えている。

本版は後掲慶安元年刊本に次いで刊行された寛文一一年板の後刷本で、両書共那波道円校元和三年古活字二〇卷本の翻刻である。

本書入は見返に書入られた「校合凡例」や卷末の校合識語に依るに、伴信友校本(今井似閑・加茂季鷹・興田吉従・鈴屋等の校合書入説を含む)と城戸千盾蔵の上田百樹校本(藤原貞幹校合書入説を含む。又信友も校合に利用す)とを移写した山根輝実本によって江藤正澄が校合書入し、更に二十九年後校斎の「箋注倭名類聚抄」(明治一六年刊本)を使って同様の措置を

講じたもので、朱墨書入万紙に満ち一見錯綜、恰も過ぎたるは及ばざるが如しという俚諺を想起せしめる。押紙や本文を切貼りによって訂した箇所や、書入丁の綴加え等があり、特に第三―五冊に多い。

卷末の朱筆校合識語を記せば、卷二末尾題下「天保十一子年三月廿九日以城戸翁校合」以下裏丁「寛政十戊午十二月三日於貴布祢宿直所敲硯氷再校終 甲斐権守加茂季鷹／寛政十二年庚申十月廿五日夜写畢 興田吉從／享和三癸亥年十二月十一日於若狭小浜旅寓朱校合了元本中至訓字異任意用捨之／文化二丑年八月於全所以三本 立入信友／文化三歳以丙寅年八月廿日以鈴屋翁校本校之了嘉永二己酉十六交了輝実十月九日朱交了／（以下嘉永二…と並べ小字で）中ト標サスイト云ヘルハ此ノ鈴屋本ナルベシ中ハ中西本也／又云古本又古トモイヘルカミニユイト云ヘルト同歟異歟」、卷四「天保十二年四月廿九日合再校合（低頭）／亥十二月十六日以上朱書写終一校丑八月以三本校／文化三年八月以鈴屋校本校之了 信（花押）／嘉永二己酉年十月卅日伴信友翁校本比交了 藤原山根輝実／明治十年四月借得京人辻鼻真工之蔵本山根輝実自筆之物遂校訂／畢無比之弥書也 広瀬神社大宮司正七位江藤正澄」、卷五「天保十一子年正月廿三

日」、卷六「寛政三年五月一校畢／全十年十二月於貴布祢以今井似閑氏校本再校畢 甲斐権守加茂季鷹／全十二年庚申二月廿七日写畢 興田吉從／享和四年正月廿九日右朱校写畢 立入信友／嘉永二己酉年十一月七日比交了 主税少属藤原輝実／明治十年六月中澣以山根輝実校合之本遂訂正了 広瀬神社大宮司 江藤正澄」、卷八「文化三歳次甲寅年八月以鈴屋本比校了 伴信友（花押）／嘉永二己酉年十一月十四日以伴信友翁交本比交了 山根輝実（花押）／明治十年六月中旬以辻鼻真工之蔵山根輝実之校本遂校訂了／広瀬神社大宮司 江藤正澄」、卷九「文化二年校正畢 御里御民上田百樹／天保十年十二月朔日校合 輝実／明治十年五月日校合了 江藤正澄」、卷一二「天保十一子年正月十八日以城戸翁校本校合／天保十二年五月七日／弘化四年丁未四月一日以伴信友翁本合校合了／ 輝実／明治十年五月日於南都旅宿校合了／ 江藤正澄」、卷一四「天保十一子年正月十二日合校合」、卷一六「嘉永三戊酉年十一月七日伴信友翁本比交了^{十九再} 輝実／明治十年六月下旬以輝実之校本遂訂正畢 正澄」、卷二〇「和名類聚抄対校／天文本 同本所校二本 僧契冲今井似閑校本^{賀茂神庫所納}／本居宣長翁所校古写数本 藤貞幹所校古写数本 波伯部百樹所校古写三本／活字本 一印本^{寛文七年村上氏刊行} 異本

尾張真福寺所藏古写本 又異本四本／其他古昼所引用 伊勢山

田中西氏所藏古写本文政五年正月比較了と校合底本を記す。「対校」の

題前に「伴翁本第一ニ書ケリ／天文本奥書云寛保癸亥五月中弦

於皇都書肆得之／皇蘇桑門東垂総陽香取郡／鐫木邨法印快賢伴

題」と天文本の奥書を記し、押紙に「中西本卷第八奥書臨摹／

自公意僧正御伝領／三井沙門任契」と中西本の奥書を記す。な

お此対校の箇所には押紙が貼られ、同文の対校本を挙げ「以上

二十余本若反切之字及所用仮字之不同不違毛拳如是者間避煩／

不批之／文化九年冬偶在京遊梅尾山高山寺觀寺庫所藏古文書目

録載和名类聚抄一部／請之院主欲比較主許可尔後未得便宜不果

姑俟它日而已／文化十酉年十一月廿一日 文政五午年正月又校

古本記上／伴州五郎信友記」と記されている。対校本には全て

鈎点が引かる。此記述から、信友は折角現存最古の伝本である

高山寺本に遭遇しながら、目睹し校合するの果せなかつたこと

が分る。刊記の後に末に「右引用書目私附之 貞幹」と題する

「和名類聚鈔引用書私附之 伴信友（私以下朱書）」三丁を綴加

う。「引用書」中の朱書は信友の増補である。附綴引用書末朱

書「嘉永三己戌年十月廿二日交合了伴信友翁校本（十月廿二日の

奥書と「丙申年仲冬、隅東日下部勝美天文一本〇〇」と末に題する識語各半

丁あり。識語裏丁に墨書「文化四年七月別本又大須本もて校合

し又／天文本をも得て再校し早ぬ／左京御民波伯部百樹／天保

十二年六月七日以城戸翁本合校合早／左京人 藤原輝実／明治

十季五月下澣以京人辻鼻真工藏山根輝実自筆之校本／加訂正畢

奇代之珍書也後裔勿忽諸云爾／広瀬神社大宮司正七位江藤正

澄」。見返「校合凡例」中掖斎箋注本の凡例等を記した末に「明

治卅九年六月以松田敏美本抄録焉／江藤正澄識」、「同三十九年

六月十二日以松田敏美本抄録畢 江藤正澄識」と書す。

伴信友前出。ハ〇九一―b―三九―五

又 大五冊 移写賀茂季鷹校合書入本

香色刷毛目格子文様表紙（二七・二×一九・二糎）同前題簽。

第一冊の表紙に「加茂季鷹校合書入／大野洒竹珍蔵」と朱書さ

る。「洒竹文庫」朱印押捺。

卷二末に「寛政十壬午十二月三日於貴布衾宿直所敲硯氷／甲

斐権守賀茂季鷹」、卷六末に「寛政三年五月一校畢／同十年十

二月於貴布衾以今井似閑氏校本再校終／甲斐権守賀茂季鷹」と

いう前掲書の信友が校合に使用せる一本と同じ識語を持つ本の

移写。朱筆で、卷七より墨筆（但し第一三丁裏―第一五丁裏ま

で朱)で校合書入が為され、眉上に「季鷹案」「貞直按」「貞衡案(云)」「衡云」等の按語が記されてある。卷一五以下書入なし。押紙も存する。

賀茂季鷹前出。ハ〇九一―b―四〇―一五

又 大五冊 校合書入本

茶刷毛目表紙(二六・五×一九・四糎)題簽同前。「閑齋藏」「百魚」(陰刻)「瓊能/屋藏/書印」「銀座/第三街/廿二号/地/市/川」(木葉型)各朱印を鈐す。

朱墨校合書入、押紙あり。卷末に「以大須本/以本山和名」等とある如く、古活字本・大須本・本居本・本山和名等で校合が為されている。卷二〇の眉上に「幹按」の按語あり、藤原貞幹校合本も参照されているようだが、卷一五以下に同書の校合書入が見られる次掲四四番本には此按語は記されていない。ハ

〇九一―b―四一―一五

又 大五冊 文化三年八月山田吉從移写藤原貞幹校合書入本

香色刷毛目格子文様表紙(二六・六×一九・二糎)題簽同前。

「山田藏書」「清舎/函書」の朱印が鈐さる。

卷一五以下のみなれど朱墨緑筆の書入周密。眉上に「幹按」

「朝按」の按語が見え、押紙・切貼による訂正・綴加え等あり。卷末に「引用書」三丁を貼附す。末に「天文伝写本跋尾/第一卷 詠全宗書之 天文丙午天/第二卷 詠全宗書之 天文丙午天/第三卷 詠和仲東請書之 天文丙午天/第四卷 詠奔俊書之 天文丙午天/第五卷 詠伊舜上人書之 天文丙午天/以丙申年仲冬隅東日下部氏所伝写之本一校/寛政六年甲寅秋日左京藤原貞幹/「道貞/之印」(陰刻)/享和三年九月五日/右無仏齋所校和名鈔借上田百樹藏本再写/文化三年丙寅八月廿五日源吉從」の校合識語あり、此も三九番既出の上田百樹本の校合書入移写本であることが分る。しかし、三九番本には更に此後文化四年の再校が加えられていることが前述の校合識語から判明する。

藤原貞幹前出。ハ〇九一―b―四四―一五

又 大五冊 書入本

香色刷毛目格子文様表紙(二六・四×一九・四糎)題簽同前。全冊目錄外題を書きて貼附す。前附は序・凡例・題倭名鈔・惣目錄の順に綴じらる。

朱墨の書入は巻により精疎はあるものの周密で新古の二手あり、「古事記」伝等諸書を引き注解を施す。「貞丈考に」等の書

入が眉上にあるが、他の書入本の移写ではなく親ら博搜して施したものである。他の書入移写本とは殆ど一致しない。

押紙も多い。美作国の条には押紙に「美作ノ郡国人ニヨク尋ベシ」と、云ってみれば至極当然のことが書かれている。ハ〇九

一b―四六―五

又〔後印〕(京 弘簡堂須磨勘兵衛) 大五冊 移写小

沢蘆菴等校合書入本

香色刷毛目表紙(二五・九×一八・六纏) 同前題簽。前附は序・惣目録・凡例・題倭名鈔の順に綴じらる。同前刊記の後に双边奥附「皇都書林 富小路通三条上ル町 弘簡堂 須磨勘兵衛」が裏表紙見返に貼附さる。「樾廼屋蔵」の朱印を鈐する。

本書も朱墨藍代赭の書入稠密で押紙もある。末に藍で「慶安元子 曆霜月吉辰 新刊／藍書 小沢蘆菴自筆摹写」と記さる。

此は校合に用いた次掲慶安版の刊記を誌したもの。序題下に

「異本 附注 庚子六月(以上朱書、以下墨書) 又古写本一

部／別蔵／右季鷹校本／併録／朱書 天文本 藍書小沢芦菴贅

本」と校合凡例書入らる。「降陣按」「千蔭按」等の按語が眉上に写さる。刊記の後に「丙申年仲冬 隅東日下部」と末に題する一丁が綴じられ、次に「右天文本題尾／天明辛卯秋九月校合

竟功」と朱書さる。頻出する此天文本の識語を三九番本で対校しつつ、本書によって掲げておく。

疇昔訪於山岡子亮君主人遂謂曰(此)比者得見和名類聚鈔古本蔵在下総国香取郡也吾將比校於通本吾子幸為之耦焉乃示其書

点檢之則品彙叙列頓異且無(官)宦職及国郡部於是從容而謂曰夫

鑿柄既殊方円蔑復所容非(飛)翅不相容而已得無遂不堪為其用哉

今閱此書復亦有焉不若兩存而貽異同於後昆也僕請臨摹可乎

主人曰諾乃齋歸廬數日而(月)贍写成矣凡十卷古人称和名類聚鈔

二十卷和名十卷林羅浮子亦謂和名有詳略二本意者此或其略

者歟如其詳本蓋後從經增修也書中多魚魯脱闕今姑仍其旧觀

者審諸

小沢蘆菴前出。ハ〇九―一b―四三―五

倭名類聚鈔 源順撰 那波道円校 〔慶安一年二月〕

刊 寛文七年八月以後〔修〕〔大坂 渋川清右衛門〕

大五冊 移写清水浜臣校合書入本

紺色表紙(二五・九×一八・二纏) 黄地双边題簽「和名類聚

鈔 三四(五六・七八・九十)」と刻さる。第一冊左肩直に「和名類

聚鈔 考式 卷」と書す。各冊表紙左下端に「式」「参」「四」

「伍」と書さる。「倭名類聚鈔序」四丁、元和三年丁巳冬十一月

日 羅浮散人洗筆於雲母谿清処「題倭名鈔」三丁、番陽那波道円識「新刻倭名類聚鈔凡例」一丁を冠す。巻頭「倭名類聚鈔巻第一（一二十）源順撰」と題署す。巻一のみ題名の名と類の間に連合符を附し、「源順撰」と送仮名を刻す。双辺（一九・九×一五・〇糶）無界一〇行一七字、訓点・送仮名・音訓合符附刻。版心粗黒口三黒魚尾、魚尾間、上に「和名巻之幾」、下に「丁附」。尾題「倭名類聚鈔巻第一（一二十）終（巻第十六）」。巻末に「寛文七丁未歳仲秋日／書林 大坂心齋橋順慶町柏原屋 波川清右衛門版」の刊記あり。各巻丁数、巻一本文一七、巻二一一九、巻三一二四、巻四一一五、巻五一二四、巻六一三〇、巻七一二二、巻八一二〇、巻九一二二、巻一〇一一七、巻一一一一六、巻一二一二四、巻一三一一六、巻一四一一八、巻一五一一四、巻一六一一〇、巻一七一一二、巻一八一一〇、巻一九一二五、巻二〇一二八丁。「遠藤蔵」の朱印を鈐する。

二八すなわち巻末の四丁を覆せりによって修刻した印本であることが分る。本修印本に狩谷棧齋の校合書入が手写された早稲田大学蔵本が「早稲田大学蔵資料影印叢書」に高梨信博氏の解題を附して影印されている。

清水浜臣前出。ハ〇九―一b―四二―五

又 大五冊 嘉永五年穂積直道移写清水浜臣校合書入本
「和名類聚抄 二（五）」、和の字巻三は倭、巻四は味、巻一題簽剝落。この題簽は前出寛文一一年刊の波川清右衛門後印本と同じ。前掲本と次掲村上勘兵衛印本とは同題簽であるから、同じ波川印本でも本帙やや後印か。本慶安刊本、後に行字数を増やし、丁数を減じて再板された寛文刊本共に、波川清右衛門は村上勘兵衛から求板している。同系の書物を揃え、その印行を一手に為さんとする書肆の戦略が、本書の印行についても又見られる。題簽は始め村上からのものを襲用し、後改めたが、再板本には慶安本の題簽をそのまま流用したということであろうか。しかし所詮想像は想像にすぎず、多くの板本を比較調査することによってしかこの謎は解けない。

本版は後掲の村上勘兵衛印本と比するに、巻二〇の第二五一

本書入は朱墨（大凡朱）で押紙も存し、殆ど前掲書と一致す

る。「浜按」「久老云」「契云」等の按語が眉上に書入らる。第一冊裏表紙見返に「嘉永五八月廿一日始／同十月十九日終」と朱書、同第三冊裏表紙見返には墨筆で「嘉永五壬子五月廿七日

初／同六月十四日卒業」と、第四冊卷末裏丁には「朱書（朱筆にて書かる）／嘉永五壬子六月十五月初（墨書）／同八月四日終（朱書）」と、また第五冊裏表紙見返には朱で「文化十二年

九月念二以畧本比較了聊註所見 泊泊主人／文政二年閏四月右

泊泊舎以本書入写早 平盛正／文政三年七月以右盛正本書入写

早後ニ／疑シキトコロハ泊泊舎ノ本ヲ見テ正シツ 源敬義／嘉

永元年五月右以敬義本書入写早 中原為行／同壬子年右以為行

本書入写早 穂積直道」の校合識語が記されている。ハ〇九一

一b―四五―五

又〔慶安一年一月〕刊 寛文七年八月印（京） 村

上勘兵衛） 大合四冊 書入本

紺色表紙（二五・八×一八・五糎）双辺題簽「和名類聚鈔

二二（五六・十二・二十・七十八）」と刻す。題下巻次に第一冊「三四」

第二冊「八九七」第三冊「十四十五十六」第四冊「十九廿」と書足す。

表紙右肩に朱（第一冊のみ墨筆で朱書の上をなぞる）にて目録外題を書す。前附は序・凡例・題倭名鈔の順に綴ず。刊記「寛

文七丁未歲仲秋日村上勘兵衛刊、刊記上下の匡郭削去痕あり入木の痕跡明かに見ゆ。「尚古／斎／所藏」「尚古斎」（陰刻・各冊末）「□筠地蔵書」の朱印を鈐する。

朱墨書入、押紙・不審紙あり。朱句点・朱引が存し「今俗ト云」と今俗名を記すことが多い。本書は他の校合書入本の移写ではなく、自らよく訓み考証を下したものの如くである。ハ〇九一―b―四七―四

新撰字鏡

〔積昌住〕 〔狩谷椽斎〕（真末）写 大一冊

清水浜臣・狩谷椽斎書入本

白色表紙（二八・四×二〇・六糎）左肩に直に「中清書／新

撰字鏡 三」と書し、右に目録外題「玉田水金木艸禾末竹」と

書す。板本の刷反古を用いし如し。内題なく、「玉部五十四」

と小題して本文に入る。無辺無界八行小字双行。大体上下二段

に書さる、字面高約一九・一糎。本文眉上に標注・按文等あり、

字面高約五・一糎。卷末「鳥部六十三」と題され、以下欠。全

二六丁。「清水浜／臣蔵書」「青裳文庫」「洒竹文庫」卷末に

「泊泊舎蔵」朱印が鈐さる。

眉上に標字を朱書し（一部墨筆）、按文や校字の理由等を記す。眉上の書入は本文を写した後から書加えられた如くである。

「浜臣按」「真末按」「毛利貞齋曰」等の按語が見え、切貼による訂正も見られる。掖齋(真末)の若書か。

浜臣は掖齋の一歳年少。浜臣・掖齋・大野洒竹通蔵、外題の「中清書」は第二段階の清書の意か。次掲本は本書の影写部分を含む完本である。ハ〇九―一b―四八―一

新撰字鏡 釈昌住 影写〔狩谷掖齋〕手抄校合書入本

大一冊 薄様紙

浅葱色布目表紙(二七・三×一八・四糎)左肩に直に「新撰字鏡」と書す。求法僧昌住「新撰字鏡序」三丁、「新撰字鏡総目」二丁を冠す。内題「新撰字鏡」。無辺無界八行、大体上下二段に書さる。字面高約一八・七糎。本文眉上に標注あり、字面高約五・〇糎。尾題「新撰字鏡終」。本文八九丁。「洒竹文庫」の朱印を鈐する。

前掲書は本書の一部であり、本書はその影写による完本。ただ前掲書では□で囲まれていた出典名が本書では朱書されている。眉上の標字が木部の途中からないのは前掲書と共通する。

押紙あり。

本書は類書体の漢和辞書であるが、未だノートの輯集にとどまり全体的な構成・統一を欠く憾がある。しかし引用に佚書・

佚文が含まれ、異体字和製漢字も多く採録されており、掖齋等が若年から関心を示したのも宜なる哉の観がある。享和三年に所謂抄録本系統を底本とした板本が出版されている。本帙本文また抄録本系統の群書類従本に同じい。

詳本である所謂天治本は文政年間に二巻が、掖齋没後の安政三年に残りの一〇巻が人間に現われ、此一二巻が今宮内庁書陵部に蔵せられている。ハ〇九―一b―四九―一

倭訓栞前編四五巻首一巻 谷川士清 安永六年九月・文

化二年二月・文政一三年閏三月刊(京 風月荘左衛門等) 大三四冊 弘化四年七月神谷克楨令写伴信友

書入本

紺色空押唐草文様表紙(二五・六×一八・二糎)第二九冊以

下(二五・七×一八・三糎)双辺題簽「和訓栞」序 凡例 一(安

之部二八―於之部三十八)と刻さる。オヤシクニヒトモトフリノリナガシラフミ、

旨書」四丁、倭訓栞 凡例二丁を冠せ、「倭訓栞／洞津 谷川

士清 纂／大綱」と題署す。第二冊より「倭訓栞前編二(一四

十五) 洞津 谷川士清 纂」。双辺(二〇・一五×一四・九糎)

無界一四行。漢字平仮名交り。版心白口単黒魚尾、上象鼻に

「倭訓栞」、魚尾下に「卷之幾 〇丁附」と刻す。卷首丁に「卷

之二阿（五衣乎・六上加八六下・九計）」と五十音分類の標目
小題を刻するもあり。尾題「和訓栞前編二（七）」「倭訓栞前編
三（一五・八一・一二・四十三・四十五）」「倭訓栞前編六上終」
「倭訓栞前編卷之六終」「倭訓栞前編九（十三・十七・十九・四
十二）終（但し卷九計の部、古の部は前出）」「和訓栞前編十八
終」。文政十二年五月 孫谷川士行謹記「跋」半丁あり、裏丁
に刊記「文政十三庚寅閏三月発行／書肆／東都 須原屋茂兵衛
／京師 出雲寺文次郎／風月荘左衛門／本屋儀助／洞津 篠田
伊十郎」。卷二三裏表紙見返单边奥附「安永六丁酉之歳九月吉
日発行／書肆／東都 須原屋茂兵衛／京師 山本平左衛門／出
雲寺文次郎／風月荘左衛門」。卷二八裏表紙見返に同じく单边
奥附「文化二乙丑之歳十二月吉日発行／書肆／東都 須原屋茂
兵衛／京師 出雲寺文次郎／風月荘左衛門」。各卷丁数、第一冊
大綱卷一―通四七、第二冊卷二―五六、第三冊卷三―四二、第
四冊卷四―三三、第五冊卷五―二一、第六冊卷六上―三九、第
七冊卷六下―三四、第八冊卷七―二〇、第九冊卷八―三二、第
一〇冊卷九―計九、古通四三、第一一冊卷一〇―三九、第二二
冊卷一一―四六、第二三冊卷一二―二六、第一四冊卷一三―二
六、第一五冊卷一四―五〇、第一六冊卷一五―二三・卷一六―

三六、第一七冊卷一七―一一・卷一八―三四、第一八冊卷一九
―三八、第一九冊卷二〇―一二・卷二一―九、第二〇冊卷二二
―一二・卷二三―一三、第二一冊卷二四―三八、第二二冊卷二
五―四〇、第二三冊卷二六―二三・卷二七―八、第二四冊卷二
八―二三、第二五冊卷二九―三四、第二六冊卷三〇―四二、第
二七冊卷三一―一九・卷三二―一一、第二八冊卷三三―二八、
第二九冊卷三四―三三、第三〇冊卷三五―一九、第三一冊卷三
六―二二、第三二冊卷三七―七・卷三八―五・卷三九―二・卷
四〇―四・卷四一―三、第三三冊卷四二―二二・卷四三―九・
卷四四―六、第三四冊卷四五―跋文共四九丁。「岡部氏／臧書」
「大嶋／之記」の朱印を鈐する。

本書は第二音節まで五十音で排列した本邦初の五十音引き辞
書で、百科事典的要素をも合せ持つ。著者は安永五年に没して
おり生前にその刊行を見ることはできなかった。中編三〇巻後
編一八巻は補訂整齊を得て文久二年・明治二〇年に漸く刊行せ
られている。

本書入は奥に「伴所蔵写本奥書」と貼紙に朱書され、二丁ほ
どの識語が記されている。その末に「文化九とせといふとし／
霜月権園にしるす／平由豆流／文化十二乙亥年四月雇人令書寫了

伴信友(花押)ノ右和訓栞三十八卷借伴信友翁之遺本課村瀬光利
令書写訖ノ弘化四丁未年七月 神谷克楨」。全卷殆ど代赭色で
記され朱墨藍(卷二九以下)筆を交ゆ。卷三〇迄は押紙に墨筆
で平田本との校合が為されている。卷二九以下は書入の体式が
やや異なる。前編卷二著者題署の左に「伴 信友補稿」、同じく
卷四には「伴 信友補遺ノ他人ノ説ニハ名ヲ挙予カ考説ハソノ
ノ所々ニ名ヲイハス」、同じく卷六「信友 追補 稿」等と朱
書さる。卷二九見返の附箋には「伴氏所蔵の本は此末行以下い
また上梓ならざる前に写さしめたるなり今校合するにこれにあ
りてかれになきありかれにありてこれになきありみな是を記す
に青色をもてわかつてり(以上藍)代赭にてしるせるは前巻の例
と同じされとこの以下は大かた伴翁みづからもせられたるな
り(朱)」と記されている。「信云(按)」「天野信景云」等の按
語が見える。綴加えもあり、卷三六本文前には「衣の部」(肩
上に「重復」と代赭にて記す)五丁が綴じられてある。

信友の令写させた岸本由豆流の識語に曰く。

…このふみみつかふたつはさきに板にゑりたれば。たれ
くももたらぬはなし。しかはあれとその末のひとつは。
いまた世におこなはれねは。…としころゆかじとおもひわ

たりつゝ。伊勢の国なる大御神にまうづといふ人ごとに。
いかでかのくにの書あき人にまれ。さるへきたよりたにあ
らはもとめいてたまひてよとて。ことつけやりしこと。こ
としまてみたひになりたれと。みなよしとてかへりぬ。
さるをことしやよひのころ。わかうるはしき友なる。樋口
よしきてふ人いせちにかへるといふに。またさきのこと言
いてやりしかは。こたひはからうしてもとめ得ぬとてもて
こしかた。とる手おそしとくりかへし見るに。さきに板に
ゑりたるかたよりは。たらぬ事すくなからず。そはさきの
かたは板にゑれるきさみ。ふたよひよく校合せしを。すゑ
のかたは板にゑらぬさきに谷川のぬしみまかられしかは。
草葉のまゝにて写しつたへるなるへし。しかいへるは。あ
いうえをのえのまきに。やいゆえよのえの巻をくらへ見て
も。しるへし。あはれこのたに川のぬし今しはしかほと世
にありて。みなよから校合しはたらんには。いみしき文
ならんをあはれく。

第二冊の見返に書入に使用せる他の辞書類等の出典引用書の
略号凡例が記されている。見返又は扉に目録が書入られている
冊もある。令写者の神谷克楨には、同じく信友校合書入の「新

撰字鏡」を嘉永元年に令写したものが存し、今静嘉堂文庫に所蔵されている。

明治卅一年七月—十二月皇典講究所より刊行された「増補和語林訓栞」は、増補者の井上頼圀・小杉楳邨が信友の書入を取捨案配して翻印した改編本である。

和名類聚抄以下各項に見られる如く、江戸時代の学者は辞書に校合や出典・意味等の書入を行ない増補しつつ、自ら独りの辞書を作り上げることに熱意を注いだ。本稿(一)でも取上げた雑抄で目睹した書物の詞華集を作り、辞書を整備増強して自らのデータバンクとし、索引・覚書摘録書を作り上げていく。工具書が現今の如く利便でなかった時代には、自らにそれを課さねばならなかった。かかる編著は当時の学人にとって云わば現代のカードにも、またコンピュータにも比すべきものであったろう。労を惜じまず遠きを辞せず、資料や人を博搜して稠密な、一見煩瑣とも思われるこうした書入を行ったのも、ひとえにこの当時の文明の利器の利用の為であったのであろう。

伴信友前出。著者谷川士清、医家にして国学者。安永五年没、享年六十八。ハ〇九—一b—五〇—三四

素書 「宇佐美瀧水(恵)」校 「明和六年二月」刊

大一冊 素書国字解附刻本 猪飼敬所訂正書入本

香色空押〇に唐花文様表紙(二七・四×一九・四櫃)「素書」と篆体にて書さる。巻頭「素書／漢黄石公伝」と題す。单边(一八・八×一三・六五櫃)無界六行一二字。訓点・送仮名・音訓合符・句点・圈点附刻。版心白口単黒魚尾、上象鼻に「素書正文」、版心下部に丁附を刻す。尾題「素書終」、題下に「宇佐美恵校本猪飼彦博再訂」と書さる。全一〇丁。「中島／幹事／函書」「猪飼／敬所翁／遺書」「村山／自彊」の朱印を鈐する。

巻頭に「漢書張良伝曰。」として、張良が本書を手に入れた経過を引き、末に「猪飼彦博曰。素者未染絲也。凡物質而無飾曰素。此書所言。小則養性保身。大則治世安民。言近而旨遠。隻辞無浮飾。故名之曰素書也歟。」と書さる。本文の訓点・送仮名等を塗抹して朱訂し、眉上に校注・解注を標記す。「物茂卿以為不字衍、非是、」等徂徠の説を改めている。本書すなわち徂徠著・宇佐美瀧水校「素書国字解」の附刻正文である。

本書は「漢黄石公伝」と題する兵書であるが、宋の張商英による仮託書で、本版刊行以前既に江戸初刊の張商英附注本が存する。

猪飼敬所前出。ハ〇九—一b—五一一

追記

- 一、本題簽は原刻本では「うつほ物語 小題 幾巻」とあるのに対し、修印本から改められたもので、本文も巻によってはかなりの葉を覆刻により彫り直しているが、その違いを一目瞭然たらしめるのは、「国讓下」第四八丁裏末行の「神仏」が修印本では神字のみ墨格となっていることである。本版には文化の補刻年を削去し、延宝の原刊記のみを残した後印本も存するので、題簽・刷の良否と共に、此箇所は修刻本識別の決め手となる。
- 二、撰者藤原貞幹の自筆稿本・書入本類はその弟子山田以文に受継がれたものが、今静嘉堂文庫にかなり収められている。又中山信名のそれも、同様弟子の色川三中に受継がれたものが、同文庫に多数蔵されている。
- 三、日尾荆山の旧蔵書・書入本類は今静嘉堂文庫に収蔵されている。
- 四、本版初印本には、修印本で剝去せられた「すへて此六帖いかにやらん……」の刊語半丁が存し、末に「寛文九己酉年春帰吉日／中野太郎左衛門／同 五郎左衛門」の刊記が見られる。
- 五、本版実は元禄三年一月の刊記を持つ修刻本が存する。原刻

- 本は「元禄三年／庚午孟春吉日／書林／洛陽 永田調兵衛／武江 武藤与惣兵衛／同 河崎七郎兵衛／同 高嶋弥兵衛」の刊記を有するが、その巻末一丁を覆刻によって改刻したもので、武江とのみで書肆名のない所から見て、或いは合版の所蔵板木の留板などの問題で、求板時等に何らかのいざこざが生じ、その虚に乗じて江戸で刷られたものかも知れない。明和七年以後の求板本では問題の一葉は全て又元に復している。（補記三）
- 六、旧蔵者雨森信成は、ラフカディオ・ハーン小泉八雲の「ある保守主義者」のモデルでもあり、ハーンの影の助作者・資料提供者でもあった人で、その郷土福井の山下英一氏の調査により事績が明らかにされ、後それらをもとに平川祐弘氏が「日本回帰の軌跡―埋もれた思想家 雨森信成―」（始め「新潮」昭和六一年四月号所載、後「破られた友情」新潮社一九八七年七月刊に収めらる）を発表した。稲岡勝氏の教示による。
 - 七、同版本によって本文では触れ得なかった本書の塗抹箇所を記しておく。巻頭振仮名「ヤマトブミノマキノツイテ／（内

題下) ヒトマキニアタルマキ 江家古本点同之ノヤマトブミ
マキノツイテヒトツノヤマトブミマキノツイテヒトツニアタ
ルマキ」(小題下) カミノヨノカミノマキノカミノヨノカム
ノマキ」。「マキノツイテフタマキニヘアタルマキ」。「カンヨ
ノシモノマキ」。

本版は早稲田大学図書館山本ちえ子氏の調査によると刊行
後間もなく修刻され、後巻末原刊語の年紀と題署とを改刻し
後に「寛文九己酉年⁽¹⁷⁰⁴⁾ノ正月吉辰ノ武村市兵衛昌常ノ村上勘兵
衛元信ノ山本平左衛門常知ノ八尾甚四郎友春」を加刻した後
修本、同刊記で更に修刻を加えた通修本が存する。始めの修
刻は一部の覆刻と、巻二二等の全巻覆刻によるものを含み、
通修本では更に訓点にかなりの差異が見られると云う。今修
刻箇所の一例を挙げれば、巻一第二五―二八丁は覆刻による
改刻で、二六丁表第五行末「相對^{アイムカッテ}」の振仮名を「アイムカテ」
と誤刻している。書紀諸版本の中では本版の伝存が最も多い
ようである。

補記

一、本稿(一)で触れた杉原心齋の旧蔵書類は、今静嘉堂文庫に収
められている。

二、読書指南本文庫写本の底本である武田科学振興財団杏雨書
屋所蔵恭仁山荘本を目睹することができた。書名は始め「読
書指南」とあり、藍筆で「学令広注」(本稿(一)に「学令広洋」
とあるは誤植)と改め、再転して「読書指南」に戻ったこと
が分る。

三、本版追記五で原刻と見たのは実は修印で、原刻本は四肆版
の「洛陽 永田調兵衛」を加刻せぬ江戸の三肆によるもので
ある。四肆版は巻一・二二等かなりの葉を覆刻により改めて
いる。巻二は丁附が始め「八」「九」「又ノ九」となってい
るが、改刻本では「八」「八」「九」と刻されており、此第八
丁のみ同版で他は全て覆刻されている。従って追記五で修刻
本としたのは通修本と見做すべきである。